第２章

神性と神聖な奉仕

第１節

व्यास उवाच
इति सम्प्रश्नसंहृष्टो विप्राणां रौमहर्षणिः ।
प्रतिपूज्य वचस्तेषां प्रवक्तुमुपचक्रमे ॥ १ ॥

ヴャーサ　ウヴァーチャ
vyāsa uvāca

イティ　サンプラシュナ・サンムフリシュトー
iti sampraśna-saṁhṛṣṭo

ヴィプラーナーンム　ラウマハルシャニヒ
viprāṇāṁ raumaharṣaṇiḥ

プラティプージャ　ヴァチャス　テーシャーンム
pratipūjya vacas teṣāṁ

プラヴァクトゥンム　ウパチャクラメー
pravaktum upacakrame

vyāsaḥ uvāca—ヴャーサが言った; *iti*—そのように; *sampraśna*—完全な質問; *saṁhṛṣṭaḥ*—完璧に満足して; *viprāṇām*—その場にいた聖者達の; *raumaharṣaṇiḥ*—ローマハルシャナの子、すなわちウグラシュラヴァー; *pratipūjya*—彼らに感謝したあと; *vacaḥ*—ことば; *teṣām*—彼らの; *pravaktum*—彼らに答えるために; *upacakrame*—試みた。

ローマハルシャナ（Romaharṣaṇa）の子、すなわちウグラシュラヴァー（Ugraśravā）（スータ・ゴースヴァーミー）は、ブラーフマナたちの完璧な質問に心から満足し、感謝したあと、かれらに答えはじめた。

要旨解説

スータ・ゴースヴァーミーは、ナイミシャーラニャの聖者たちから受けた６つの質問に１つずつ答えていきます。

第２節

सूत उवाच
यं प्रव्रजन्तमनुपेतमपेतकृत्यं
द्वैपायनो विरहकातर आजुहाव ।
पुत्रेति तन्मयतया तरवोऽभिनेदु-
स्तं सर्वभूतहृदयं मुनिमानतोऽस्मि ॥ २ ॥

スータ　ウヴァーチャ
sūta uvāca

ヤンム　プラヴラジャンタンム　アヌペータンム　アペータ・クリテャンム
yaṁ pravrajantam anupetam apeta-kṛtyaṁ

ドゥヴァイパーヤノー　ヴィラハ・カータラ　アージュハーヴァ
dvaipāyano viraha-kātara ājuhāva

プトゥレーティ　タン・マヤタヤー　タラヴォー　ビヒネードゥス
putreti tan-mayatayā taravo 'bhinedus

タンム　サルヴァ・ブゥータ・フリダヤンム　ムニンム　アーナトー　スミ
taṁ sarva-bhūta-hṛdayaṁ munim ānato 'smi

sūtaḥ—スータ・ゴースヴァーミー; *uvāca*—言った; *yam*—〜の者に; *pravrajantam*—放棄階級になるために去ろうとしている時; *anupetam*—神聖な糸による再生の儀式を受けることなく; *apeta*—儀式を受けることなく; *kṛtyam*—規定義務; *dvaipāyanaḥ*—ヴャーサデーヴァ; *viraha*—別れ; *kātaraḥ*—〜を恐れて; *ājuhāva*—叫んだ; *putra iti*—おお、我が子よ; *tat-mayatayā*—そのように心を奪われて; *taravaḥ*—すべての木々; *abhineduḥ*—応えた; *tam*—彼に; *sarva*—すべての; *bhūta*—生命体; *hṛdayam*—心; *munim*—聖者; *ānataḥ asmi*—お辞儀をした。

シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「私は、すべての人々の心に入ることのできる偉大な聖者・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに敬意を捧げる。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが放棄階級（サンニャーサ）の生活をするために、聖なる糸をさずかる儀式や高尚な階級がおこなう儀式もせずに出家しようとしたとき、父ヴャーサデーヴァは別れを恐れ、『おお、我が子よ』と叫んだ。まさに、同じ別れの悲しみを感じていた木々たちも、悲嘆にくれていた父に応えてこだまするばかりだった」

要旨解説

ヴァルナ（*varṇa*）とアーシュラマ（*āśrama*）の制度は、従う者たちが守るべき数多くの規定義務を定めています。その義務として、「ヴェーダの研究を望む志願者はかならず正しい精神指導者に近づき、自分を弟子として受けいれてもらうよう乞わなくてはならない」と命じています。聖なる糸は、アーチャーリャ・正しい精神指導者からヴェーダを学ぶ資格がある人々の印です。シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、誕生した瞬間から解放された魂でしたから、そのような浄化の儀式を受けませんでした。

ほとんどの人たちはふつうの人間として生まれ、浄化手段を受けいれることで２番目の誕生をさずかります。新しい光を見いだし、精神的に高められる道を歩こうとする人は、ヴェーダの教えをさずかるために精神指導者に近づこうとします。精神指導者は、誠実な心で尋ねる者だけを弟子にし、聖なる糸を授けます。そのようにして、人は再誕者・ドゥヴィジャ（*dvija*）になります。ドゥヴィジャの資格を得たあと、ヴェーダを学ぶことができるようになり、ヴェーダの教えに精通するようになった人がヴィプラ（*vipra*）になります。ヴィプラ、すなわち資格をそなえたブラーフマナは、こうして絶対者を悟り、精神生活をさらに追求してやがてヴァイシュナヴァの段階に高められます。ヴァイシュナヴァはブラーフマナを超えたいわば「大学院」の境地と言えます。向上心に燃えるブラーフマナはかならずヴァイシュナヴァになるものです。ヴァイシュナヴァは自己を悟った博学なブラーフマナなのですから。

シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはヴァイシュナヴァとして生まれた人物です。ですから、ヴァルナーシュラマ（*varṇāśrama*）制度の手順のすべてを踏む必要はありませんでした。ヴァルナーシュラマ・ダルマ（*varṇāśrama-dharma*）の最終的な目的は、未熟な人を主の純粋な献愛者、つまりヴァイシュナヴァに変貌させることにあります。ですから、ウッタマ・アディカーリー（*uttama-adhikārī*）「一流のヴァイシュナヴァ」に認められたヴァイシュナヴァは、誕生や過去の行ないがどうであれ、すでにブラーフマナとして迎えられます。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブはこの原則を受けいれ、イスラム教の家庭に生まれたシュリーラ・ハリダーサ・タークラを「聖なる名前のアーチャーリャ」と認めました。結論として言えるのは、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはヴァイシュナヴァとして誕生し、ゆえにブラフマンとしての資質はすでにそなえていたということです。どのような儀式も受ける必要はありませんでした。キラータ（Kirāta）、フーナ（Hūṇa）、アーンドゥラ（Āndhra）、プリンダ（Pulinda）、プルカシャ（Pulkaśa）、アービーラ（Ābhīra）、シュンバ（Śumbha）、ヤヴァナ（Yavana）、カサ（Khasa）、あるいはそれ以下の人類など、どれほど下等な人間であっても、ヴァイシュナヴァの慈悲をさずかってもっとも気高い超越的な位置に高められるので

す。シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはシュリー・スータ・ゴースヴァーミーの精神指導者です。ですから、ナイミシャーラニャの聖者たちの質問に答えるまえに、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに尊敬の礼を捧げたのでした。

第３節

यः स्वानुभावमखिलश्रुतिसारमेक-
मध्यात्मदीपमतितितीर्षतां तमोऽन्धम् ।
संसारिणां करुणयाह पुराणगुह्यं
तं व्याससूनुमुपयामि गुरुं मुनीनाम् ॥ ३ ॥

ヤハ　スヴァーヌバハーヴァンム　アキヒラ・シュルティ・サーランム　エーカンム
yaḥ svānubhāvam akhila-śruti-sāram ekam

アデャートゥマ・ディーパンム　アティティティールシャターンム　タモー　ンダンム
adhyātma-dīpam atititīrṣatāṁ tamo 'ndham

サンムサーリナーンム　カルナヤーハ　プラーナ・グヒャンム
saṁsāriṇāṁ karuṇayāha purāṇa-guhyaṁ

タンム　ヴャーサ・スーヌンム　ウパヤーミ　グルンム　ムニーナーンム
taṁ vyāsa-sūnum upayāmi guruṁ munīnām

yaḥ—彼は; *sva-anubhāvam*—自ら理解している（経験豊かな）; *akhila*—全体的に; *śruti*—諸ヴェーダ; *sāram*—真髄; *ekam*—唯一の人物; *adhyātma*—超越的な; *dīpam*—たいまつの明かり; *atititīrṣatām*—克服することを望んで; *tamaḥ andham*—ひじょうに暗く物質的な; *saṁsāriṇām*—物質主義的な人間の; *karuṇayā*—いわれのない慈悲心から; *āha* —言った; *purāṇa*—ヴェーダの補足; *guhyam*—ひじょうに内密な; *tam*—彼に; *vyāsa-sūnum*—ヴャーサデーヴァの子; *upayāmi*—私の敬意を表する; *gurum*—師; *munīnām*—偉大な聖者達の。

ヴャーサデーヴァの御子息、すべての聖者の師である人物・シュカに、私は敬意を捧げる。師は、物質存在という暗闇の世界から脱けだそうともがいている愚かな物質主義者を深く哀れみ、ヴェーダ知識の真髄を自ら体験することで完全に理解したあと、その真髄についてきわめて秘奥なこの補足的知識を語った。

要旨解説

シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーは、この祈りの節をとおして『シュリーマド・バーガヴァタム』の完全な紹介をほぼ要約しています。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、『ヴェーダンタ・スートラ』に対する自然な補足的注釈書です。『ヴェーダンタ・スートラ』、別名『ブラフマ・スートラ』は、ヴェーダ知識の真髄をしめすためにヴャーサデーヴァが編纂したものです。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、この真髄に関する的確な注釈書です。シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは『ヴェーダンタ・スートラ』を完全に悟った教師であり、ゆえにその注釈書である『シュリーマド・バーガヴァタム』も悟っています。そして、無知を完全に克服したいと願う迷える物質主義者たちに尽きることのない慈悲をしめそうと、この秘奥な知識を初めて復唱しました。

物質中心の人間が幸福になれるかどうかは、論じるまでもありません。物質的な生物は、ブラフマーであろうと小さな蟻であろうと幸福にはなれません。だれでも幸福になろうとつきることなく計画を立てていますが、一人残らず、物質自然界の法則のために挫折しています。ですから、物質中心の世界は神の創造界のもっとも暗い部分であると言われています。しかし、不幸な物質主義者であっても、抜けだしたいと願うだけで幸福の望みは叶います。ところが、残念なことに愚かなかれらは逃げだすことさえ願いません。そのことから、かれらはトゲのある枝を味わうラクダにたとえられます。ラクダは血と混ざった枝を好物にしていますが、味わっているのは自分の血であり、舌がそのトゲで切られていることを知りません。同じように、物質的な人は自分の血をまるで蜂蜜のように甘く感じており、自分で作りだした物事にいつも苦しめられているのに、そんな状態から逃れたいと思いません。そのような物質主義者をカルミー（*karmī*）といいます。無数のカルミーのなかで、一握りの人だけがその迷路から逃れることを望みます。その知的な人をギャーニー（*jñānī*）といいます。『ヴェーダンタ・スートラ』はそのようなギャーニーのために用意されています。しかし、シュリーラ・ヴャーサデーヴァは至高主の化身であることから、『ヴェーダンタ・スートラ』がよこしまな者たちに誤用されることを予見できたため、『バーガヴァタ・プラーナ』とともに『ヴェーダンタ・スートラ』を補足しました。この『シュリーマド・バーガヴァタム』は『ブラフマ・スートラ』に関する最初の注釈書であると明言されています。シュリーラ・ヴャーサデーヴァも、『シュリーマド・バーガヴァタム』を、超越的な解放の境地にいたわが子シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに教えました。シュリーラ・シュカデーヴァは内容を悟り、そして説明しました。シュリーラ・シュカデーヴァの慈悲があったからこそ、『バーガヴァタ・ヴェーダーンタ・スートラ』は、物質存在から脱出したいと願う真剣な魂が読むことができるようになったのです。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は『ヴェーダンタ・スートラ』に関する他の追随を許さない注釈書です。シュリーパーダ・シャンカラーチャーリャは意図的に『ヴェーダンタ・スートラ』にかかわりませんでしたが、それはすでに存在する最適な注釈書を超えることはできないと知っていたからです。かれは自著『シャーリーラカ・バーッシャ』を書き、従者たちは『シュリーマド・バーガヴァタム』をなにか「新しい」解説書として軽んじました。私たちは、マーヤーヴァーダ学派による『シュリーマド・バーガヴァタム』を敵視する解説に惑わされてはなりません。初心の生徒はこの導入となるシュローカから、『シュリーマド・バーガヴァタム』はパラマハンサ（*paramahaṁsa*）のためにある唯一の超越的な文献であることを、そして「悪意」と呼ばれる物質的な病に無縁な文献であることを知らなくてはなりません。マーヤーヴァーディーは、シュリーパーダ・シャンカラーチャーリャがナーラーヤナを至高主として認め、また物質創造界を超えた方であることを認めているにもかかわらず、至高主を妬んでいます。妬み深いマーヤーヴァーディーは『シュリーマド・バーガヴァタム』の世界に入ることはできませんが、物質存在から出たいと望む人は、解放の境地にいるシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られたこの『シュリーマド・バーガヴァタム』に保護を求めることができます。この書物は、ブラフマン、パラマートマー、バガヴァーンとして悟られる超越的な絶対真理者を見ることを可能にする光明なのです。

第 4 節

नारायणं नमस्कृत्य नरं चैव नरोत्तमम् ।
देवीं सरस्वतीं व्यासं ततो जयमुदीरयेत् ॥ ४ ॥

ナーラーヤナンム　ナマスクリテャ
nārāyaṇaṁ namaskṛtya

ナランム　チャイヴァ　ナローッタマンム
naraṁ caiva narottamam

デーヴィーンム　サラスヴァティーンム　ヴャーサンム
devīṁ sarasvatīṁ vyāsaṁ

タトー　ジャヤンム　ウディーライェートゥ
tato jayam udīrayet

nārāyaṇam—人格主神; *namaḥ-kṛtya*—敬意を捧げたあと; *naram ca eva*—そしてナーラーヤナ・リシ; *nara-uttamam*—超人的人間; *devīm*—女神; *sarasvatīm*—学問の女神;

vyāsam—ヴャーサデーヴァ；*tataḥ*—そのあと；*jayam*—克服するためのすべてのこと；*udīrayet*—告げられる。

克服する手段そのものである『シュリーマド・バーガヴァタム』を語るまえに、人格主神ナーラーヤナに、超人的な人間であるナラ・ナーラーヤナ・リシに、学問の女神である母なるサラスヴァティーに、そして著者シュリーラ・ヴャーサデーヴァに敬意を捧げなくてはならない。

要旨解説

全ヴェーダ経典と各プラーナは、物質存在の暗黒の領域を超越するためにあります。物質界にいる生命体は、遠い昔から利己的感覚を満たすことに囚われているために、神との絆を忘れている状態にいます。物質界での生存競争に終わりはなく、計画を立てるだけで抜けだすことはできません。無限につづく生存競争の終焉を望むならば、神との永遠な絆をふたたび築かなくてはならないのです。そして、そのような治療法を実践する意思があるなら、ヴェーダやプラーナのような経典に救いを求めなくてはなりません。愚かな人たちは、プラーナとヴェーダは関係がない、と言います。しかし、プラーナはヴェーダの補足説明であり、さまざまな型の人間が対象になっています。だれもかれも同じだというわけではありません。徳性に動かされている人もいれば、激情あるいは無知の性質に動かされている人たちもいます。各プラーナは、あらゆる段階の人がその内容を学び、見失った自分の立場を取りもどし、そして厳しい生存競争を克服できるように分けられています。シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーはプラーナを吟唱する道をしめしました。これは、ヴェーダ経典や各プラーナを人々に広める熱意を持つ人たちが従える方法です。『シュリーマド・バーガヴァタム』は非の打ちどころのないプラーナであり、物質の束縛から永遠に解放されたいと望む人々のためにとくに用意されています。

第 5 節

मुनयः साधु पृष्टोऽहं भवद्भिर्लोकमङ्गलम् ।
यत्कृतः कृष्णसम्प्रश्नो येनात्मा सुप्रसीदति ॥ ५ ॥

ムナヤハ　サードゥウ　プリシュトー　ハンム
munayaḥ sādhu pṛṣṭo 'haṁ

バハヴァドゥビヒル　ローカ・マンガランム
bhavadbhir loka-maṅgalam

ヤトゥ　クリタハ　クリシュナ・サンプラシュノー
yat kṛtaḥ kṛṣṇa-sampraśno

イェーナートゥマー　スプラシーダティ
yenātmā suprasīdati

munayaḥ—おお、聖者達よ; *sādhu*—これは関連している; *pṛṣṭaḥ*—尋ねた; *aham*—私自身; *bhavadbhiḥ*—あなた達によって; *loka*—世界; *maṅgalam*—福利; *yat*—なぜなら; *kṛtaḥ*—する; *kṛṣṇa*—至高主; *sampraśnaḥ*—関連した質問; *yena*—それによって; *ātmā*—自己; *suprasīdati*—心から喜んで。

聖者たちよ。私はあなたたちから正しい質問を受けた。主クリシュナにかかわる質問だからこそ価値があり、そしてそれは世界の幸福と結びついている。このような質問だけが、自己を完全に満たすことができる。

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』を学ぶことで絶対真理者が理解できる、とこれまで述べられているのですから、ナイミシャーラニャの聖者たちは適切で正しい質問をしていると言えます。至高主で、また絶対真理者であるクリシュナにかかわる質問だからです。主は『バガヴァッド・ギーター』（第 15 章・第 15 節）で、すべてのヴェーダにこめられているのは主クリシュナを探求する熱意だけであると言っています。このように、クリシュナに関連する質問はヴェーダにまつわる質問の要点です。

全世界に質問と答があふれています。鳥も獣も人間も、尽きることのない質問と答をしながら忙しく暮らしています。朝、鳥たちは巣のなかで目をさまし、その瞬間から夕方になって巣に戻ってくるまで質問と答で忙しく、人間も（夜熟睡している時間を除いて）質問と答に明け暮れ、ビジネスマンは質問と答を繰りかえしながら寸暇を惜しんで働き、裁判所の弁護士も学生も質問と答をしながら東奔西走し、国会議員も政治家も、新聞社の社長も質問と答で大忙し。このように、かれらは死ぬまで質問と答を繰りかえしているのですが、心はまったく満たされていません。魂の満足は、クリシュナにかかわる質問と答によって得られるものなのです。

クリシュナは私たちのもっとも親密な主人、友人、父親、子ども、あるいは恋愛の相手です。クリシュナを忘れてしまった私たちは、多くの質問と答の対象を作りだしましたが、そのどれ一つをとっても、私たちを完全に満たしてはくれません。すべては——クリシュナを除き——つかのまの満足を与えてくれるだけ。完全な満足感を味わいたいのであれば、クリシュナに関連した質問と答をしなくてはなりません。質問されて答えるという行為なくして、私たちは一瞬たりとも生きていけません。『シュリーマド・バーガヴァタム』はクリシュナにかかわる質

問と答を扱っていますから、この崇高な書物について読んだり聞いたりすることで最高の満足を得ることができます。私たちは『シュリーマド・バーガヴァタム』を学び、政治や宗教に関連するあらゆる問題に対する全面的な解決を得なくてはなりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』とクリシュナは、すべての物事の核心なのです。

第６節

स वै पुंसां परो धर्मो यतो भक्तिरधोक्षजे ।
अहैतुक्यप्रतिहता ययात्मा सुप्रसीदति ॥ ६ ॥

サ ヴァイ プンムサーン パロー ダハルモー
sa vai puṁsāṁ paro dharmo

ヤトー バハクティル アドホークシャジェー
yato bhaktir adhokṣaje

アハイトゥキ アプラティハター
ahaituky apratihatā

ヤヤートゥマー スプラシーダティ
yayātmā suprasīdati

saḥ—それ; *vai*—確かに; *puṁsām*—人類のために; *paraḥ*—崇高な; *dharmaḥ*—職業; *yataḥ*—それによって; *bhaktiḥ*—献愛奉仕; *adhokṣaje*—超越性のために; *ahaitukī*—いわれのない; *apratihatā*—壊れることのない; *yayā*—それによって; *ātmā*—自己; *suprasīdati*—完全に満たされて。

全人類にとっての最高の職業・ダルマ（*dharma*）とは、崇高な主に愛情をこめた奉仕を達成できる手段のことである。そのような献愛奉仕は、不純な動機を持たずに為すべきであり、なにごとにも妨げられずに自己を完全に満足させることができる。

要旨解説

この節のなかで、シュリー・スータ・ゴースヴァーミーは、ナイミシャーラニャの聖者たちの最初の質問に答えています。聖者たちは、啓示経典全体を要約し、そして最重要部分をしめすよう求めました。道を踏みはずした人々や一般の人々がそれらをかんたんに受けいれらるように、との思いだったのです。ヴェーダは人類に対して２種類の本務を定めています。一つはプラヴリッティ・マールガ（*pravṛtti-mārga*）「感覚の楽しみの生涯」で、もう一つは、ニヴリ

ッティ・マールガ（*nivṛtti-mārga*）「放棄の生涯」です。快楽だけの生き方は劣り、至高の原因である人物のために自らを犠牲にする生き方は優れています。生命体の物質界での生活は、真の生活が病に冒された状態です。自分本来の真の生活ではなく、病に冒されてしまった生活をしているのです。真の生活とは精神的な存在、すなわちブラフマ・ブータ（*brahma-bhūta*）の存在であり、永遠で至福と知識に満たされた生活です。物質存在は一時的でまぼろしにすぎず、苦しみに満ちています。幸福は一切ありません。人々は苦しみから逃れようとむなしい努力をつづけ、苦しみが途切れた時が幸福だと勘違いしています。ですから、一時的で、苦しみと幻想に包まれた物質的快楽中心の生き方は劣っています。しかし、至高主への献愛奉仕は永遠で幸福感に満たされ、修練する人をすべてに目覚めた生活に導いてくれますから、優れた質をそなえた使命とされています。この生き方は、劣性の質にかかわることで穢されることがあります。たとえば、物質的な利益を得るために献愛奉仕をすれば、放棄の道の妨げになることはまちがいありません。究極の善のために放棄心や自制心を養う努力は、病に冒された生活での楽しみよりも確かに優れています。病に冒された楽しみは、病状を悪化させ、長引かせるだけです。ですから主への献愛奉仕は、純粋無垢、すなわち物質的な楽しみに対する望みが一切ない状態でなくてはなりません。だからこそ、不要な望み、果報的活動、哲学的推論に穢されていない主への献愛奉仕という優れた道を受けいれなくてはなりません。それだけが、主への奉仕という永遠の心の安らぎに私たちを導いてくれるのです。

私は意図的にダルマということばを「本務」と表現しています。それはダルマには「自分の存在を支えるもの」という語源があるからです。生物の存在を支えるのは、自らの行動と至高主・主クリシュナとの永遠な絆との調和です。クリシュナは生命体の中軸で、すべてを魅了する生命体であり、他の全生命体（あるいは永遠の姿）のなかの永遠な姿である方です。どの生命体も、精神的存在において自分本来の永遠な姿を持っており、クリシュナはそのようなかれらにとって永遠な魅力です。クリシュナは完全な全体者であり、他一切はクリシュナの部分体です。その関係は、奉仕をする者と奉仕を受ける者として説明できます。それは超越的で、物質界にある私たちの経験とはまったく次元が違います。この「奉仕をする者と奉仕を受ける者」との関係は、親密な関係におけるもっとも心満たされた境地であり、献愛奉仕を高めるほどに理解できるようになります。だれもが、たとえいま物質存在に縛られていようとも、主に崇高な愛情奉仕をすべきです。献愛奉仕こそが、徐々に私たちに真の生活の手がかりを与え、このうえない満足感を提供してくれるのです。

第 7 節

वासुदेवे भगवति भक्तियोगः प्रयोजितः ।
जनयत्याशु वैराग्यं ज्ञानं च यदहैतुकम् ॥ ७ ॥

ヴァースデーヴェー　バハガヴァティ
vāsudeve bhagavati

バハクティ・ヨーガハ　プラヨージタハ
bhakti-yogaḥ prayojitaḥ

ジャナヤティ　アーシュ　ヴァイラーギャンム
janayaty āśu vairāgyaṁ

ギャーナンム　チャ　ヤドゥ　アハイトゥカンム
jñānaṁ ca yad ahaitukam

vāsudeve—クリシュナに; *bhagavati*—人格主神に; *bhakti-yogaḥ*—献愛奉仕との接触; *prayojitaḥ*—適応されて; *janayati*—作り出す; *āśu*—すぐに; *vairāgyam*—無執着; *jñānam*—知識; *ca*—そして; *yat*—であるもの; *ahaitukam*—いわれのない。

人格主神、シュリー・クリシュナに献愛奉仕をすることで、すぐにいわれのない知識をさずかり、物質界に対する執着心が消えさっていく。

要旨解説

至高主・主シュリー・クリシュナへの献愛奉仕は物質的な感情で行なわれている、と誤解している人々は、経典が勧めているのは儀式・慈善・苦行・知識・神秘的な力・超越的な悟りを得るための方法なのだ、と異議を唱えるかもしれません。バクティ・主への献愛奉仕は、高尚な活動ができない者のためにある、と考えているのです。一般的にバクティの崇拝は、シュードラ、ヴァイシャ、それほど知性の高くない女性のためにあるとされています。しかし、それは事実ではありません。バクティ・ヨーガはあらゆる崇高な活動の頂点にあるため、崇高で、かんたんに修練できる手段です。至高主と結ばれたいと真剣に願う純粋な献愛者には崇高で、バクティという家の入り口に立つ初心者にはかんたんな方法です。至高主・シュリー・クリシュナとの絆を築くことは偉大な科学であり、シュードラ、ヴァイシャ、女性、あるいは低いシュードラよりもさらに低い人々を含む万民に開かれた方法です。ならば、高尚なブラーフマナや自己を悟った偉大な王たちは言うまでもありません。純粋で科学的なバクティ・ヨーガを実践すれば、儀式・慈善・苦行・他の高度な活動はおのずと達成されるものです。

知識と無執着は、超越的な悟りの道に用意された大切な２つの原則です。精神的な道は、物質・精神すべての完璧な知識へと私たちを導き、その完璧な知識をさずかれば、物質的な感情に無執着になり、精神的な活動に執着するようになります。知識に乏しい人は「物質的な物事への無執着」と聞くと、何もしない状態を考えがちですが、そうではありません。ナイシュカルマ（*naiṣkarma*）は、良い結果や悪い結果を作りだす行動をしない、という意味です。「否定」と言っても、「肯定」を否定するわけではありません。「不必要な事」を否定すると言っても、「必要な事」まで否定するわけではありません。同じように、物質的な姿に無執着になっても、真実の姿を否定したわけではありません。バクティ崇拝法は、真実の姿を悟るためにあります。その姿を悟れば否定的な姿はおのずと放棄されるものです。ですから、真実の姿に対して真実の奉仕をとおしてバクティ・ヨーガを高めていけば、劣った物事に無執着になり、優れた物事に執着するようになります。同じように、バクティの方法は生命体のもっとも気高い本分ですから、物質的な快楽に無執着になる道に導いてくれます。それが純粋な献愛者の印です。献愛者は愚かではありませんし、劣った物事のために働いたり物質的な価値観を持っていたりするわけでもありません。その境地は、机上の空論で達成できるものではありません。全能者の恩寵があってこそ実現するものです。「純粋な献愛者は知識や無執着心という優れた気質をすべてそなえているが、知識や無執着心だけでバクティの原則に精通することはできない」。これが結論です。バクティは、人類にとって最良の本務なのです。

第８節

धर्मः स्वनुष्ठितः पुंसां विष्वक्सेनकथासु यः ।
नोत्पादयेद्यदि रतिं श्रम एव हि केवलम् ॥ ८ ॥

ダハルマハ　スヴァヌシュテヒィヒタハ　プンムサーンム
dharmaḥ svanuṣṭhitaḥ puṁsāṁ

ヴィシュヴァクセーナ・カタハース　ヤハ
viṣvaksena-kathāsu yaḥ

ノートゥパーダイェードゥ　ヤディ　ラティンム
notpādayed yadi ratiṁ

シュラマ　エーヴァ　ヒ　ケーヴァランム
śrama eva hi kevalam

dharmaḥ—職業; *svanuṣṭhitaḥ*—自分の立場の観点から実行される; *puṁsām*—人類の; *viṣvaksena*—人格主神（完全分身）; *kathāsu*—〜の教えにおいて; *yaḥ*—〜であること; *na*—で

はない; *utpādayet*—作り出す; *yadi*—もし; *ratim*—魅力; *śramaḥ*—無益な労働; *eva*—〜にすぎない; *hi*—確かに; *kevalam*—全体的に。

自分の立場に応じて本務をまっとうしても、その活動によって人格主神の教えに対する魅力が呼び起こされなければ、それはまったくの無益な労働にすぎない。

要旨解説

さまざまな人生観にもとづくさまざまな本務があります。肉体を超えたものを見ることのできない感性の乏しい物質主義者は、感覚を超えたものは考えられません。ですから、そのような人の本務上の活動は、凝縮された自己中心、あるいは拡大された自己中心の活動でしかありません。凝縮された自己中心の活動は、自分の肉体が軸になっています——下等な動物の行動と同じです。拡大された自己中心的活動は人間社会に見られる現象であり、肉体の快適さが重視され、家族・社会・地域社会・国家・世界が活動の中心になっています。これらの単純な物質主義者の上に、心の及ぶ範囲で思考力を働かせる思索家がおり、詩を詠んだり、哲学に親しんだり、体や心に限られた自己中心という同じ目的で「主義」を作ったりします。しかし体と心の上にはいまは眠れる魂が存在し、その魂が体から去ってしまえば、体と心を中心とした概念は跡形なく消えさってしまいます。それでも、知性に欠ける人々は、精神魂が必要としている情報をまったく知りません。

愚かな人々は魂についてなにも知らず、また魂が体と心を超えていることも理解できないため、自分の義務を遂行しても心は満たされません。この節では、自己の満足について取りあげられています。自己は濃密な肉体と希薄な心を超えています。体と心を動かしている原動力なのです。眠れる魂がなにを必要としているかを知らなければ、体と心を喜ばせても幸福になれません。体と心は、魂を覆っている不要な物質にすぎません。魂が必要としている物事こそが満たされるべきです。鳥かごをきれいにするだけで鳥を満足させることはできません。鳥にとってなにが必要なのかを知らなくてはならないのです。

魂は、物質の束縛という限られた世界を抜けだして完全な自由をつかみ、巨大な宇宙を取りかこむ壁を突きやぶり、そして自由の光と神に出会うことを待ち望んでいます。それが魂に必要なことであり、その完全な自由は、完全な魂すなわち人格主神にめぐりあうときに初めて達成されます。物質界に生きるすべての生物の内に神への愛情が眠っています。私たち本来の精神的気質は、濃密・希薄な物体に対する歪んだ愛着という形で体と心をとおして現われます。だからこそ私たちは、神聖な意識を呼びおこす本務を遂行しなくてはなりません。これを可能にする唯一の方法が至高主の崇高な活動について聞いて語ることであり、神の超越的なことば

を聞いたり唱えたりする執着心を高めてくれない本務の活動は、「時間の無駄」とこの節で表現されています。なぜなら、どのような本務の義務でも（それがどのような主義に属していようとも）、魂を自由にすることはできないからです。一般的な救済活動でさえ、自由を授ける根源の人物を見逃しているため、無価値な活動であると言えます。たとえ愚鈍な物質主義者でも、手にいれた物質的な利益が、現世でも別の世界でも時間と空間によって制限されていることは理解できます。かれは、たとえ天界のスヴァルガローカに高められても、自分の魂が求めつづけている永遠の住まいを見つけることはできません。魂の永遠な渇望は、完全な献愛奉仕という完璧な科学的な方法によって満たされなくてはならないのです。

第９節

धर्मस्य ह्यापवर्ग्यस्य नार्थोऽर्थायोपकल्पते ।
नार्थस्य धर्मैकान्तस्य कामो लाभाय हि स्मृतः ॥ ९ ॥

ダハルマッシャ ヒ アーパヴァルギャッシャ
dharmasya hy āpavargyasya

ナールトォー ルタハーヨーパカルパテー
nārtho 'rthāyopakalpate

ナールタハッシャ ダハルマイカーンタッシャ
nārthasya dharmaikāntasya

カーモー ラーバハーヤ ヒ スムリタハ
kāmo lābhāya hi smṛtaḥ

dharmasya—本務上の仕事; *hi*—確かに; *āpavargyasya*—究極の自由; *na*—ではない; *arthaḥ*—終わり; *arthāya*—物質的利益のために; *upakalpate*—〜のためにある; *na*—どちらも〜でない; *arthasya*—物質的利益の; *dharma-eka-antasya*—究極の本務上の奉仕をしている者にとって; *kāmaḥ*—感覚を満たすこと; *lābhāya*—〜の達成; *hi*—確かに; *smṛtaḥ*—偉大な聖者たちによって説明されている。

すべての本務上の仕事は究極の解放のためにあるもので、決して物質的な利益のために為されてはならない。また聖者たちは、究極の本務上の奉仕をしている者は、手にいれた物質的な利益を感覚満足のために使ってはならない、と説いている。

要旨解説

すでに説明したように、主に純粋な献愛奉仕をすれば、完璧な知識と物質生活に対する無執

着心もおのずと高まります。一方で、さまざまな本務上の仕事すべては、宗教的な仕事も含め、物質的な利益を得るためにあると考える人たちがいます。世界のどこであっても、一般人は、宗教や他の本務上の奉仕と交換に物質的利益を得ようとする傾向があります。ヴェーダ経典にでさえ、宗教的活動による物質的利益という誘惑の罠がしかけられており、ほとんどの人がそのような宗教的な誘惑や恩恵に心を奪われています。なぜ、宗教にたずさわる人でさえ物質的な利益に誘惑されるのでしょうか。それは、物質的利益が自分の望みを叶えてくれるからであり、それは結局感覚を満たすことにつながっているからです。本務上の仕事にかかわるこの関係には、物質的利益を伴う宗教活動、望みを成就させる物質的利益が含まれています。感覚を満たす行為は、さまざまな仕事で奔走している人々の一般的な行動パターンです。しかし、このシュローカにあるスータ・ゴースヴァーミーのことばによれば、『シュリーマド・バーガヴァタム』の見解と同じく、それは無価値なものとされています。

どのような本務上の仕事であっても、物質的利益のためだけに行なってはなりませんし、手にいれた利益を感覚の満足だけに使うべきではありません。物質的利益を活用する方法が、これからの節で説明されています。

第１０節

कामस्य नेन्द्रियप्रीतिर्लाभो जीवेत यावता ।
जीवस्य तत्त्वजिज्ञासा नार्थो यश्चेह कर्मभिः ॥ १० ॥

カーマッシャ　ネーンドゥリヤ・プリーティル
kāmasya nendriya-prītir

ラーボホー　ジーヴェータ ヤーヴァター
lābho jīveta yāvatā

ジーヴァッシャ タットゥヴァ・ジギャーサー
jīvasya tattva-jijñāsā

ナールトホー　ヤシュ　チェーハ カルマビヒ
nārtho yaś ceha karmabhiḥ

kāmasya—望みの; *na*—ではない; *indriya*—諸感覚; *prītiḥ*—満足; *lābhaḥ*—利益; *jīveta*—自己保存; *yāvatā*—～ほど～である; *jīvasya*—生命体の; *tattva*—絶対真理者; *jijñāsā*—質問; *na*—ではない; *arthaḥ*—終わり; *yaḥ ca iha*—ほかの何物でも; *karmabhiḥ*—本務上の義務によって。

人生の目標を感覚満足に向けてはならない。人間は絶対真理者について問うために生きてい

るのだから、健全な生活、そして自らを維持するに足るだけの生活を望むべきである。それ以外を活動の目的にしてはならない。

要旨解説

混乱をきわめている物質文明は、感覚満足を叶えるだけのまちがった方向に進んでいます。そのような文明では、感覚満足が生活全体の最終的な目標になっています。政治・社会事業・利他的行為・慈善活動、さらには宗教や魂の救済においても、感覚を満たそうとする同じ傾向がますます強くなっています。政界では、各党の指導者が自分の個人的感覚を満たすために争っています。有権者は指導者と仰がれる人物を讃えますが、じつは自分たちの感覚満足を約束してくれればへつらうだけで、満たしてくれなければその地位から引きずりおろします。結局、指導者は有権者の感覚を満たすことがでず、いつも有権者を失望させています。これはどの分野にも共通していることです。だれも人生のほんとうの問題について真剣に考えていないのです。救いの道を求めている人でさえ絶対真理者と融合することを望み、その種の感覚満足を求めて精神的自殺をしてしまいます。しかし『シュリーマド・バーガヴァタム』は、「感覚満足のために生きてはならない」と教えます。感覚を満たすのは自分を維持する程度で充分であり、感覚満足そのものが目的であってはなりません。肉体は感覚でできており、またある程度満たす必要がありますから、それなりの規則が用意されています。しかし、感覚は際限なく楽しませるべきものではありません。たとえば、男女が結婚してともに生活することは子孫のために必要なことですが、感覚の楽しみのためであってはなりません。国民が自ら抑制しないときに産児制限が推奨されますが、愚かな人たちは、絶対真理者を求めれば自動的に産児制限につながるということを知りません。絶対真理者を求める人はいつも真理を探すために行動していますから、不必要な感覚満足に惑わされることは決してありません。ですから、どのような生活をしていても、究極目標は絶対真理者の追究に向けられるべきです。そのように行動する人は感覚満足に走らなくなり、幸せに暮らせるようになります。絶対真理者とはどういうものかが、これからの節で説明されていきます。

第１１節

वदन्ति तत्तत्त्वविदस्तत्त्वं यज्ज्ञानमद्वयम् ।
ब्रह्मेति परमात्मेति भगवानिति शब्द्यते ॥ ११ ॥

ヴァダンティ　タトゥ　タットゥヴァ・ヴィダス
vadanti tat tattva-vidas

タットゥヴァンム　ヤジ　ギャーナンム　アドゥヴァヤンム
tattvaṁ yaj jñānam advayam

ブラフメーティ　パラマートゥメーティ
brahmeti paramātmeti

バハガヴァーン　イティ　シャブデャテー
bhagavān iti śabdyate

vadanti—彼らは言う; *tat*—それ; *tattva-vidaḥ*—博学な魂達; *tattvam*—絶対真理者; *yat*—であるもの; *jñānam*—知識; *advayam*—非二元性; *brahma iti*—ブラフマンとして知られている; *paramātmā iti*—パラマートマーとして知られている; *bhagavān iti*—バガヴァーンとして知られている; *śabdyate*—そのように宣言された。

絶対真理者を知る博学な超越主義者達は、二元性のないこの本源をブラフマン（Brahman）、パラマートマー（Paramātmā）、バガヴァーン（Bhagavān）と呼ぶ。

要旨解説

絶対真理者は発生源と発生体の両方であり、そのあいだに違いはありません。ですから、ブラフマン、パラマートマー、バガヴァーンは質的にまったく同じです。同じ本源が、ウパニシャッドの生徒にはブラフマンとして、ヒラニャガルバあるいはヨーギーたちにはパラマートマーとして、そして献愛者にはバガヴァーンとして悟られています。言いかえれば、バガヴァーン・人格主神が絶対真理者を表現する究極のことばだということです。パラマートマーは人格主神の部分的な現われであり、姿かたちのないブラフマンは、太陽光線が太陽神からの光であるように、人格主神から放出されているまばゆい光です。最初の２つの悟りしか知らない生徒は、自分たちの悟りを盾に論争することがありますが、絶対真理者を正しく見る人物は、一人の絶対真理者について３つの様相があり、３つの異なる角度から見た悟りがあることをよく知っています。

『シュリーマド・バーガヴァタム』の第１章の最初のシュローカで説明されているように、至高の真理者は自己充実し、すべてを認識し、相対性という幻想を超越している方です。相対的世界では、「知る側」と「知られる側」は異なった存在ですが、絶対真理者の内では、両者は同じです。相対的世界では、「知る側」は命ある魂、つまり優性の存在ですが、「知られる側」は命のない物体、つまり劣性の存在です。このために優性と劣性という二元性があるのですが、

絶対的世界では「知る側」と「知られる側」はともに優性の存在です。至高の力の源からは３種類の力が作りだされています。エネルギーとエネルギー源のあいだに違いはありませんが、エネルギーの質が違っています。絶対的世界と生命体はともに優性の存在ですが、物質界は劣性の存在です。劣性の力にかかわっている生命体は幻惑されており、自分を劣性の存在の一部だと考えています。このために、物質界には相対性という観念が存在しています。絶対的世界では、「知る側」と「知られる側」が異なるという観念はないため、存在するものすべてに違いはありません。

第１２節

तच्छ्रद्दधाना मुनयो ज्ञानवैराग्ययुक्तया ।
पश्यन्त्यात्मनि चात्मानं भक्त्या श्रुतगृहीतया ॥ १२ ॥

タッチ　チラッダダハーナー　ムナヨー
tac chraddadhānā munayo

ギャーナ・ヴァイラーギャ・ユクタヤー
jñāna-vairāgya-yuktayā

パッシャンティ　アートゥマニ　チャートゥマーナンム
paśyanty ātmani cātmānaṁ

バハクティヤー　シュルタ・グリヒータヤー
bhaktyā śruta-gṛhītayā

tat—それ; *śraddadhānāḥ*—真剣に知ろうとしている; *munayaḥ*—聖者達; *jñāna*—知識; *vairāgya*—無執着心; *yuktayā*—充分に備えている; *paśyanti*—見る; *ātmani*—自分自身の中で; *ca*—そして; *ātmānam*—パラマートマー; *bhaktyā*—献愛奉仕において; *śruta*—各ヴェーダ; *gṛhītayā*—適切に受けいれて。

真剣に探求する生徒や聖者は、知識と無執着心を充分にそなえ、ヴェーダーンタ・シュルティから聞いた理解にもとづいて献愛奉仕をすることで絶対真理者を悟る。

要旨解説

絶対真理者は、絶対的な真理そのものである主・ヴァースデーヴァ・人格主神への献愛奉仕という方法で完全に悟ることができます。ブラフマンは主の体から放たれる神々しい光であり、パラマートマーは主の部分的な現われです。ですから、絶対真理者のブラフマンとパラマート

マーの悟りは部分的な悟りにすぎません。人間は、カルミー、ギャーニー、ヨーギー、そして献愛者の４種類に分けられます。カルミーは物質主義者ですが、他の３種類は超越的な境地に位置しています。最高位の超越主義者は、至高者を悟っている献愛者です。２番目の超越主義者は、絶対者の完全部分体を部分的に悟っている人々、そして３番目の超越主義者は、絶対者の精神的な正体についてほとんど知らない人々です。『バガヴァッド・ギーター』や他のヴェーダ経典が述べているように、至高者は、充分な知識と物質的な物事への無執着心に支えられた献愛奉仕によって悟ることができます。すでに説明したように、献愛奉仕をすることで知識や物質に対する無執着心も自動的に身につくようになります。ブラフマンとパラマートマーの悟りは絶対真理者の不完全な悟りですから、その２つを悟る方法、すなわちギャーナとヨーガは、絶対真理者を悟るうえでの不完全な方法と言えます。物質的な物事への無執着心と知識が一体となり、またヴェーダーンタ・シュルティを耳で聞くことで確立される献愛奉仕は、真剣に悟りを求める生徒が絶対真理者を理解できる唯一の完璧な方法です。ですから献愛奉仕は、充分な知性を持たない超越主義者が修練できる方法ではありません。献愛者にも一流、二流、三流の段階があります。３番目の献愛者、つまり初心者で、知識も不充分で、物質的な物事へのかかわりを捨てきれず、また寺院で神像を崇拝する初期段階の方法に惹かれているだけの人は、物質的な献愛者と呼ばれています。物質的な献愛者は、超越的な利益よりも物質的な利益に心がうばわれています。ですから、物質的な献愛奉仕の段階から２番目の献愛奉仕へと自らを着実に高めなくてはなりません。２番目の段階にいる献愛者は、奉仕をするうえでの４つの原則――人格主神、主の献愛者、無知な人々、妬む人々――を見分けることができます。私たちは、少なくとも２番目の段階にまで自らを高め、絶対真理者を知る資格を得なくてはなりません。

ですから３番目の献愛者は、バーガヴァタ（*Bhāgavata*）という典拠から献愛奉仕にかかわる教えをさずかる必要があります。第一のバーガヴァタは純粋な献愛者、そして別のバーガヴァタは人格主神のことばです。このため３番目の献愛者は、献愛奉仕の教えを学ぶために純粋な献愛者に身をゆだねなくてはなりません。純粋な献愛者とは、『シュリーマド・バーガヴァタム』を商売にして生計をたてるような職業吟唱家のことではありません。スータ・ゴースヴァーミーのように、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの代表者で、また万民の完全な幸福のために献愛奉仕の教えを説いている人物を指します。初心の献愛者は、由緒正しい人物から教えを聞いても、そのことばに味わいを見出すことはできません。かれらは、自分の感覚を満足させようと、職業吟唱家の話を聞いて献愛者の振りをします。このような聞き方はすべてを台無しにしてしまうため、まちがった方法には用心しなくてはなりません。『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』が繰りかえし述べているように、神の崇高なことば

はもちろん超越的ですが、ヘビの舌に触れたミルクが穢される例があるのですから、職業吟唱家が話す超越的な話題に耳を傾けるべきではありません。

このように、誠実な献愛者は自らを高めるために、ウパニシャッドやヴェーダーンタ、また先代の権威者やゴースヴァーミーが残した他の書物のようなヴェーダ経典を学ぶ心構えが必要です。そのような文献のことばに耳を傾けなければ、確かな発達を遂げることはできません。また、その教えを聞いて従わなければ、見せかけの献愛奉仕はしょせん名ばかりで、献愛奉仕の道の妨げになるだけです。ですから、シュルティ、スムリティ、プラーナ・パンチャラートラの原則に立脚していない献愛奉仕は、外見だけの献愛奉仕としてすぐに拒絶すべきです。正しい権限のない献愛者を純粋な献愛者と見なしてはなりません。ヴェーダ経典の教えを正しく理解すれば、人格主神が局所的な姿として自分の内につねに存在していることが理解できるようになります。その境地をサマーディ（*samādhi*）といいます。

第１３節

अतः पुम्भिर्द्विजश्रेष्ठा वर्णाश्रमविभागशः ।
स्वनुष्ठितस्य धर्मस्य संसिद्धिर्हरितोषणम् ॥ १३ ॥

アタハ　プンビヒル　ドゥヴィジャ・シュレーシュタハー
ataḥ pumbhir dvija-śreṣṭhā

ヴァルナーシュラマ・ヴィバハーガシャハ
varṇāśrama-vibhāgaśaḥ

スヴァヌシュテヒィヒタッシャ　ダハルマッシャ
svanuṣṭhitasya dharmasya

サムシッデヒィッル　ハリ・トーシャナンム
saṁsiddhir hari-toṣaṇam

ataḥ—そのように; *pumbhiḥ*—人によって; *dvija-śreṣṭhāḥ*—再誕者の内でもっとも優れた者達よ; *varṇa-āśrama*— 4 つの階級と 4 つの地位の制度; *vibhāgaśaḥ*—その区分によって; *svanuṣṭhitasya*—自分自身の規定された義務の; *dharmasya*—本務上の; *saṁsiddhiḥ*—最高完成; *hari*—人格主神; *toṣaṇam*—喜ばしい。

おお、再誕者のなかでもっとも優れた者たちよ。ゆえに結論として言えることは、社会階級と生活区分にふさわしい本務上の義務を遂行して得られる最高の完成は、人格主神を喜ばせるということである。

要旨解説

世界のどこであっても、人間社会は４つの階級と４つの地位に区分することができます。４つの階級とは、知的階級、軍人階級、生産者階級、労働者階級のことで、これは家系ではなく、活動内容や気質で分類されます。次に、４つの生活段階、すなわち学生生活、世帯者生活、退職生活、献愛生活があります。社会に最善の利益をもたらすためにも、この生活区分は欠かせません。この区分がなければ、社会の機構は秩序ただしく発展できないはずです。そしてこの区分の目的は、*人格主神という至高の権威者を喜ばせること*でなくてはなりません。この区分はヴァルナーシュラマ・ダルマと知られており、文化的な生活にふさわしい制度です。ヴァルナーシュラマ・ダルマ制度は、絶対真理者を悟ることができるように作られています。ある階級が別の階級を支配するという不自然な制度ではありません。絶対真理者を悟るという人生の目標が、*indriya-prīti*（インドゥリヤ・プリーティ）・感覚満足への過度の執着によって見失われると、先に説明したように、ヴァルナーシュラマ・ダルマ制度は、弱い立場の階級を力ずくで支配しようとする利己的な者たちに悪用されることがあります。カリ・ユガという争いの時代ではすでにこの間違った支配が横行していますが、良識ある人々は、カーストや地位という区分は社会全体の円滑な交流のために、そして高尚な考えにもとづく自己の悟りのために用意されており、それ以外の目的はないことをよく知っています。

この節で言われているのは、人生の最高の目標、あるいはヴァルナーシュラマ・ダルマ制度の最高完成は、至高主の満足のために万民一丸となって協力する、という点にあります。これは、『バガヴァッド・ギーター』（第４章・第 13 節）でも確証されていることです。

第１４節

तस्मादेकेन मनसा भगवान् सात्वतां पतिः ।
श्रोतव्यः कीर्तितव्यश्च ध्येयः पूज्यश्च नित्यदा ॥ १४ ॥

タスマードゥ　エーケーナ　マナサー
tasmād ekena manasā

バハガヴァーン　サートゥヴァターンム　パティヒ
bhagavān sātvatāṁ patiḥ

シュロータヴィャハ　キールティタヴィャシュ　チャ
śrotavyaḥ kīrtitavyaś ca

デューヤハ　プージャシュ　チャ　ニテャダー
dhyeyaḥ pūjyaś ca nityadā

tasmāt—ゆえに; *ekena*—1点に定めることで; *manasā*—心を集中させ; *bhagavān*—人格主神; *sātvatām*—献愛者達の; *patiḥ*—守る方; *śrotavya* —聞かれるべきである; *kīrtitavyaḥ*—讃えられること; *ca*—そして; *dhyeyaḥ*—思い出されること; *pūjyaḥ*—崇拝されること; *ca*—そして; *nityadā*—絶えず。

ゆえに私たちは、献愛者の保護者である人格主神について一心不乱に絶えず聞き、讃え、思い、崇拝しなくてはならない。

要旨解説

絶対真理を悟ることが人生の究極目標であるならば、それはなんとしても実現させなくてはなりません。讃えること・聞くこと・覚えていること・崇拝すること、というこの4つの方法は、先に挙げたどの階級や地位においても共通しています。この原則に従わなければ、だれも生きつづけることはできません。生命体の生活には、この4つの生活原則にもとづく活動が含まれています。とくに現代社会では、ほとんどの活動が聞くことと讃えることに支えられています。どのような地位のどのような人でも、新聞で毎日讃えられているうちに（その内容の正否にかかわらず）一夜にして有名人に変貌します。政党の指導者が新聞の宣伝をとおして讃えられ、並の政治家がたちまち重要人物に祭られたりします。しかし、称賛に値しない人間を虚飾の PR で持ちあげても、その人物にとっても社会にとっても有意義な結果は得られません。その場限りの反応はあるかもしれませんが、恒久的な結果は生まれません。時間を無駄にしているだけです。称賛に値する真の相手は、万物を私たちのまえに具現させた最高人格主神です。この事実については本書の最初のシュローカで *janmādy asya*（ジャンマーディ　アッシャ）（第1編・第1章・第1節）と明言されました。人を讃え、人の話を聞こうとする傾向は、称賛に値する真の対象、すなわち至高の生物に向けられなくてはなりません。その心構えが私たちに真の幸福をもたらすのです。

第15節

यदनुध्यासिना युक्ताः कर्मग्रन्थिनिबन्धनम् ।
छिन्दन्ति कोविदास्तस्य को न कुर्यात्कथारतिम् ॥ १५ ॥

ヤドゥ・アヌディャーシナー　ユクターハ
yad-anudhyāsinā yuktāḥ

カルマ・グランティ・ニバンダナンム
karma-granthi-nibandhanam

チンダンティ　コーヴィダース　タッシャ
chindanti kovidās tasya

コー　ナ　クリャートゥ　カタハー・ラティンム
ko na kuryāt kathā-ratim

yat—であるもの; *anudhyā*—記憶; *asinā*—剣; *yuktāḥ*—〜を身につけて; *karma*—反動的活動; *granthi*—結び目; *nibandhanam*—組み合わせる; *chindanti*—切る; *kovidāḥ* —知性; *tasya*—主の; *kaḥ*—誰; *na*—ではない; *kuryāt*—しようとする; *kathā* —教え; *ratim*—注意。

聡明な人物は、手に剣を持ち、主を思いつづけながら反動的活動・カルマという束縛の結び目を切り離す。ならば、主の教えに耳を傾けない者がいるだろうか。

要旨解説

精神的な火花が物質と接触することで結び目が作られます。結果にこだわる活動にともなう行動と反動から解放されたいと願う人は、その結び目を切り離さなくてはなりません。解放とは、反動となって生じた活動の連鎖に束縛されない状態のことです。この状態は、人格主神の超越的な娯楽をいつも心に描いている人にはおのずから付随するものです。至高主の活動（主のリーラー・*līlā*）は物質エネルギーの様相を超越しているからです。それらは、すべてを魅了してやまない神々しい営みですから、至高主の精神的なリーラーとのふれあいは、条件づけられた魂を次第に精神的に高め、やがて物質的な束縛という結び目を切りすててくれます。

ですから、物質的束縛からの解放は献愛奉仕による副産物といえます。精神的な知識は解放を獲得するに充分ではありません。精神的知識と献愛奉仕との調和が必要です。そうすることで最終的に献愛奉仕だけが正しい方法として残り、その結果として解放が達成されます。物質的成果を求めて働いてきた人の反動としての活動さえも、献愛奉仕を取りいれることで解放につながることがあります。献愛奉仕と融合したカルマをカルマ・ヨーガ、献愛奉仕と融合した経験的知識をギャーナ・ヨーガと言います。しかし、純粋なバクティ・ヨーガはそのようなカルマやギャーナから独立しています。なぜなら、純粋なバクティ・ヨーガだけで、条件づけられた生活からの自由はもとより、主への超越的な愛情奉仕も実現されるからです。

ですから、知識にとぼしい一般人よりも賢明な人は、主について聞き、主を讃え、主を思い、いつでも主を崇拝することで、主を思いつづけなくてはなりません。それが完璧な献愛奉仕の方法です。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブにバクティ・ヨーガの布教を任されたヴリンダーヴァンのゴースヴァーミーたちは、この方法に厳格に従い、私たちのために超越的な

科学に満ちた文献を数多く残しました。『シュリーマド・バーガヴァタム』や他の由緒正しい経典の教えにもとづいて、社会のあらゆる層の人々が歩くべき道をしめしてくれたのです。

第１６節

शुश्रूषोः श्रद्दधानस्य वासुदेवकथारुचिः ।
स्यान्महत्सेवया विप्राः पुण्यतीर्थनिषेवणात् ॥ १६ ॥

シュシュルーショーホ　シュラッダダハーナッシャ
śuśrūṣoḥ śraddadhānasya

ヴァースデーヴァ　・カタハー・ルチヒ
vāsudeva-kathā-ruciḥ

シャーン　マハトゥ・セーヴァヤー　ヴィプラーハ
syān mahat-sevayā viprāḥ

プンニャ・ティールタハ・ニシェーヴァナートゥ
puṇya-tīrtha-niṣevaṇāt

śuśrūṣoḥ—聞く者; *śraddadhānasya*—細心の注意で; *vāsudeva*—ヴァースデーヴァについて; *kathā* —ことば; *ruciḥ*—親しみ; *syāt*—可能になる; *mahat-sevayā*—純粋な献愛者に奉仕することで; *viprāḥ*—おお、再誕した者達よ; *puṇya-tīrtha*—すべての悪から清められた人物達; *niṣevaṇāt*—奉仕によって。

おお、新生の聖者たちよ。邪心を一切持たない献愛者に仕えることで、すぐれた奉仕が達成される。そのような奉仕の結果、ヴァースデーヴァの教えを聞くことに強い親近感を感じるようになる。

要旨解説

私たち生命体が条件づけられるようになった原因は、主に対する反抗心です。世界には、神聖な気質を持つデーヴァ（*deva*）、そして至高主の権威に敵対するアスラ（*asura*）と呼ばれる邪悪な人間がいます。『バガヴァッド・ギーター』（第 16 章）にはアスラについて的を射た説明があり、「底なしの無知の生活へと転落していく生涯を際限なく繰りかえし、そして絶対真理者、人格主神に関する情報のかけらもない世界に堕ちていく」と述べられています。このようなアスラたちでも、さまざまな国で主に仕えている解放された召使いの慈悲をさずかり、至高者の意志によって神の意識へと導かれることがあります。そのような献愛者は主のきわめて親

密な仲間であり、かれらが社会を無神論の危険から救うために現われるとき、主の力強い化身、主の子ども、主の召使い、主の側近者と呼ばれます。しかしその誰一人として、自分を神と呼ぶようなまちがった主張をすることはありません。自分を神と放言するのはアスラの神への冒涜であり、アスラに従う邪悪な人間も、神のふりをする人間を化身として崇めたりします。啓示経典は神の化身を定義していますから、啓示経典によって証明されないような人間を神や神の化身として受けいれてはなりません。

神に仕える人物は、神のもとに帰りたいと心から願う献愛者から神に匹敵するほどの敬意を受けます。そのような召使いはマハートマー、あるいはティールタと呼ばれ、時代や場所にふさわしい布教をします。神の召使いは、主の献愛者になるよう人々に訴えかけます。自分が神と呼ばれることには耐えられません。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは啓示経典が説く化身の記述と一致した神自身でしたが、献愛者としてふるまっていました。主チャイタンニャをよく知る人々は、主チャイタンニャを神と呼びましたが、そのたびに主は手で耳をふさぎ、主ヴィシュヌの名前を唱えたものです。主は正真正銘の神自身でしたが、神と呼ばれることを断固として拒みました。主はそのようなふるまいによって、神と呼ばれて悦に入っている厚顔無恥の輩にだまされないよう警告していたのです。

神の召使いは神の意識を広めるために降誕しますから、賢明な人なら全面的にかれらと協力すべきです。主の召使いに仕えれば、主に直接仕えるよりも主を喜ばせることができます。主は、自分の召使いが適切に敬愛されている様子を見るほうを好みます。なぜなら、そのような召使いは主への奉仕のためにすべてを投げうっているからであり、主にとってはとても愛しい存在なのです。主は『バガヴァッド・ギーター』（第 18 章・第 69 節）で、身を挺して主の栄光を広めている人物ほど愛しい者はいない、と宣言しています。主の召使いに仕えることで、やがてその召使の気質を受けつぎ、神の栄光を聞くにふさわしい人物に変貌するのです。神について聞こうとする熱意こそが、神の王国に入ることのできる最初の資格です。

第１７節

शृण्वतां स्वकथाः कृष्णः पुण्यश्रवणकीर्तनः ।
हृद्यन्तः स्थो ह्यभद्राणि विधुनोति सुहृत्सताम् ॥ १७ ॥

シュリンヴァターンム　スヴァ・カタハーハ　クリシュナハ
śṛṇvatāṁ sva-kathāḥ kṛṣṇaḥ

プンニャ・シュラヴァナ・キールタナハ
puṇya-śravaṇa-kīrtanaḥ

フリディ　アンタハ　ストホー　ヒ　アバハドゥラーニ
hṛdy antaḥ stho hy abhadrāṇi

ヴィドフゥフノーティ　スフリトゥ　サターンム
vidhunoti suhṛt satām

śṛṇvatām—〜のことばを聞く熱意を高めた者達; *sva-kathāḥ*—主自身のことば; *kṛṣṇaḥ*—人格主神; *puṇya*—美徳; *śravaṇa*—聞くこと; *kīrtanaḥ*—唱えること; *hṛdi antaḥ sthaḥ* —自分の心の中で; *hi*—確かに; *abhadrāṇi*—物質を楽しもうとする望み; *vidhunoti*—洗い流す; *suhṛt*—恩恵をほどこす人; *satām*—誠実な人物の。

主シュリー・クリシュナ・人格主神は全生命の内に住むパラマートマー・至高の魂であり、誠実な献愛者に恩寵をさしのべる方である。主の教えは、正しく聞き、そして語られるときに美徳あふれることばとなり、その教えを聞く熱意を高めた献愛者の心から、物質的楽しみに対する欲望を洗いながしてくれる。

要旨解説

主シュリー・クリシュナのことばは、主となんら変わるところがありません。ですから、冒涜する心を持たずに神について聞き、神を讃えるとき、主クリシュナは超越的な音としてその場にいるのであり、またその音は主自身と同じ力をそなえています。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは『シクシャーシュタカ』で、主の聖なる名前は主の力をすべてそなえており、主自らその無数の名前に力を注いでいると述べています。唱える時間帯が厳格に決められているわけではなく、だれでも、都合のいいときに敬意をこめて集中して唱えることができます。主は、超越的な音として私たちのまえに自らを現わすほど優しい方ですが、不運なことに、私たちは主の名前や活動を聞いたり讃えたりする魅力が感じられません。聖なる名前を聞いて唱える味わいを高めることについては、すでに説明しました。それは、主の純粋な献愛者への奉仕という媒体をとおして実現されます。

主は、献愛者の呼びかけにじかに反応してくれます。献愛者が主への超越的な奉仕を始めたいと誠心誠意考え、主について真剣に聞こうとする様子を見ると、主にたやすく近づけるように内側から導いてくれます。主の国に帰ろうとする私たちの思いよりも、主はもっと強く私たちを帰してあげたいと思っています。神のもとに帰りたいと願うのは一握りの人だけで、ほとんどの人はそのようなことを考えません。しかし、そう願う人を、シュリー・クリシュナはあらゆる面で助けようとします。

神の国に入ることができるのは、罪をことごとく洗い清めた人物に限られます。物質的な罪

は、物質自然界を支配しようとする願望から生じますが、そのような望みを捨てることは並大抵の努力では実現しません。神のもとに帰ろうとする献愛者にとって、女性と財産は前途に立ちはだかる大きな障害です。献愛奉仕に励んでいた意志の強固な人物さえ、その誘惑に負け、解放の道を後退することがありました。しかし主自らが手を差しのべたときには、神聖な恩寵に支えられてすべての奉仕が順風満帆となって実践できるようになります。

女性や財産に惑わされて平静心を失うのは、とくに驚くべきことではありません。すべての生命体がそのような物事と以前から、いや太古の昔からかかわっているからであり、私たちとは本来無縁のこのような状態から立ち直るには時間がかかるものです。しかし、主の栄光を聞く努力をつづけていれば、やがて自分本来の立場に目覚めるようになります。神の恩寵を得たそのような献愛者は、混乱状態から身を守るための充分な力をさずかり、発達を阻害するあらゆる要素は着実に心から洗い流されていきます。

第１８節

नष्टप्रायेष्वभद्रेषु नित्यं भागवतसेवया ।
भगवत्युत्तमश्लोके भक्तिर्भवति नैष्ठिकी ॥ १८ ॥

ナシュタ・プラーイェーシュヴ　アバハドゥレーシュ
naṣṭa-prāyeṣv abhadreṣu

ニテャンム　バハーガヴァタ・セーヴァヤー
nityaṁ bhāgavata-sevayā

バハガヴァティ　ウッタマ・シュローケー
bhagavaty uttama-śloke

バハクティル　バハヴァティ　ナイシュテヒィキー
bhaktir bhavati naiṣṭhikī

naṣṭa—破壊されて; *prāyeṣu*—ほとんどゼロまで; *abhadreṣu*—不吉なものすべて; *nityam*—定期的に; *bhāgavata*—『シュリーマド・バーガヴァタム』あるいは純粋な献愛者; *sevayā*—仕えることで; *bhagavati*—人格主神に; *uttama*—超越的な; *śloke*—祈りのことば; *bhaktiḥ*—愛情をこめた奉仕; *bhavati*—作られる; *naiṣṭhikī*—消すことのできない。

定期的に『シュリーマド・バーガヴァタム』の法話に参加し、純粋な献愛者に仕えることで心のなかのあらゆる困難がほぼ完璧に根絶され、超越的な詩歌によって讃えられている人格主神への愛情奉仕が、不動の事実として心に刻まれる。

要旨解説

この節のことばが、自己を悟る道の障害となる心のなかにある不吉な物事を根絶する治療法です。バーガヴァタ（*Bhāgavata*）とのふれあいがその治療法です。バーガヴァタには２種類、すなわち書物のバーガヴァタと献愛者のバーガヴァタがあります。どちらも優れた治療法であり、障害を取りのぞく力をそなえています。献愛者のバーガヴァタは本のバーガヴァタに従った生活をしているため、本のバーガヴァタと同じすぐれた存在です。また本のバーガヴァタには人格主神に関する情報が満載され、そしてバーガヴァタ自身でもある純粋な献愛者たちについて述べられています。バーガヴァタの本とバーガヴァタの人物はまったく同じなのです。

献愛者バーガヴァタは人格主神・バガヴァーンの直接の代表者です。献愛者のバーガヴァタを満足させられる人は、本のバーガヴァタから恩恵をさずかることができます。私たちの判断力では、献愛者と本のバーガヴァタに仕えることで献愛奉仕の道が徐々に高まる理由はわかりません。しかしこれは、シュリーラ・ナーラダデーヴァという前世で母が下女だった人物が語っている事実なのです。母が聖者たちに仕えていたために、ナーラダ・ムニも聖者たちとのふれあいに恵まれました。聖者たちとのふれあいと、かれらが残した食べ物の残りを食べただけで、偉大な献愛者シュリーラ・ナーラダデーヴァになる機会を得たのでした。これが、バーガヴァタとの交流から生まれる奇跡的な結果です。そして、これらの結果を正しく理解するには、バーガヴァタとの誠実な交流をする人は主に揺るぎない献愛奉仕ができ、超越的な知識をたやすく手にいれられるようになる、という点に着目する必要があります。バーガヴァタに導かれながら献愛奉仕を高めるほどに、私たちは主に崇高で確かな愛情奉仕ができるようになります。ですから、本のバーガヴァタのメッセージは献愛者のバーガヴァタからさずからなくてはなりません。この２つのバーガヴァタの組みあわせによって、初心の献愛者は献愛奉仕の道を前進することができるのです。

第１９節

तदा रजस्तमोभावाः कामलोभादयश्च ये ।
चेत एतैरनाविद्धं स्थितं सत्त्वे प्रसीदति ॥ १९ ॥

タダー　ラジャス・タモー・バハーヴァーハ
tadā rajas-tamo-bhāvāḥ

カーマ・ローバハーダヤシュ　チャ　イェー
kāma-lobhādayaś ca ye

チェータ　エータイル　アナーヴィッダハンム
ceta etair anāviddhaṁ

スティタンム　サットゥヴェー　プラシーダティ
sthitaṁ sattve prasīdati

tadā—そのとき; *rajaḥ*—激情において; *tamaḥ*—無知において; *bhāvāḥ*—その状況; *kāma*—欲情と望み; *lobha*—切望; *ādayaḥ*—その他; *ca*—そして; *ye*—それらがなんであろうと; *cetaḥ*—心; *etaiḥ*—これらによって; *anāviddham*—影響されることなく; *sthitam*—立脚して; *sattve*—徳性において; *prasīdati*—このようにして完全に満足して。

心のなかで主への愛情奉仕が不滅のものとして築かれるとき、欲情、欲望、渇望といった激情と無知は心から消えていく。そのとき、献愛者は徳性に立脚し、完全に幸福になる。

要旨解説

健全な本来の状態にいる生命体は、精神的な至福に包まれて心から満足しています。この境地をブラフマ・ブータ（*brahma-bhūta*）あるいはアートマ・ナンディー（*ātmā-nandī*）、すなわち自ら満足している境地といいます。この境地は、怠惰で愚かな者が悦に入っている満足感ではありません。怠惰な愚者は無知の状態にありますが、自ら満足しているアートマナンディーは、そのような物質的な状態を超越しています。この完璧な境地は、不滅の献愛奉仕に立脚したときに得られるものです。献愛奉仕は怠惰になることではなく、魂の純粋な活動なのです。

魂の活動は物質とかかわることで不純になり、病に冒された活動は欲情・欲望・渇望・怠惰・愚かさ・惰眠といった形で現われるようになります。献愛奉仕をすることで、このような激情や無知の影響がことごとく消えさっていきます。献愛者はすぐに徳性に立脚し、ヴァースデーヴァの境地、あるいは純粋なサットヴァ（*sattva*）、すなわちシュッダ・サットヴァ（*śuddha-sattva*）に向かってさらに高められていきます。シュッダ・サットヴァの境地にいる人物だけが、主への純真な愛情という力によっていつもクリシュナを見ることができます。

献愛者はいつでも純粋な徳性にいるため、他人を傷つけることがありません。いっぽう、献愛者でない人々は、どれほど教育を受けていても人を傷つけます。献愛者は愚かでも感情的でもありません。献愛者のふりをして自画自賛しても、人を傷つけ、愚かで、激情的な人間は主の献愛者になれません。献愛者は主が持っているあらゆる優れた気質をそなえています。量的な差はあるかもしれませんが、主と献愛者が持つ質はまったく同じなのです。

第２０節

एवं प्रसन्नमनसो भगवद्भक्तियोगतः ।
भगवत्तत्त्वविज्ञानं मुक्तस्रास्य जायते ॥ २० ॥

エーヴァンᵐ　プラサンナ・マナソー
evaṁ prasanna-manaso

バハガヴァドゥ・バハクティ・ヨーガタハ
bhagavad-bhakti-yogataḥ

バハガヴァトゥ・タットゥヴァ・ジギャーナンᵐ
bhagavat-tattva-vijñānaṁ

ムクタ・サンガッシャ　ジャーヤテー
mukta-saṅgasya jāyate

evam—こうして; *prasanna*—高揚して; *manasaḥ*—心の; *bhagavat-bhakti*—主への献愛奉仕; *yogataḥ*—〜に触れて; *bhagavat*—人格主神について; *tattva*—知識; *vijñānam*—科学的な; *mukta*—解放されて; *saṅgasya*—交流の; *jāyate*—効果的になる。

主に献愛奉仕をして活気あふれる心を持つようになった人物は、純粋無垢な徳性に立脚し、物質的な物事すべてから解放された境地のなかで、明晰かつ科学的な人格主神の知識を獲得する。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第７章・第３節）では、無数の人々のなかで、一人の幸運な人間が人生の完成を目指して努力する、と言われています。ほとんどの人が激情や無知に動かされ、そのために欲情・強欲・渇望・無知・惰眠などにいつも囚われています。動物のような大衆のたった一人が人間生活の責任に気づき、規定義務に従って人生の完成を求めて努力を始めます。さらに、そうして人生を成功させた無数の人たちのなかでも、一握りの人々が人格主神・シュリー・クリシュナを科学的に理解することができます。さらに『バガヴァッド・ギーター』の第 18 章・第 55 節では、シュリー・クリシュナの科学的知識は献愛奉仕（*bhakti-yoga*）によってだけ理解できる、とも述べられています。

同じことが、この節のことばによって確証されています。一般人でも人生の成功をきわめた人でも、人格主神を科学的かつ完璧に知ることはできません。人生の完成は、自分は物体の産物ではなく精神魂であると理解したときに達成されます。そして、自分は物質となんの関係もないことを理解した人は、物質的な望みを捨て、精神的な生き物として活力に満ちた生活を始めます。この成功は、激情や無知を超えたときにこそ、つまり、ブラーフマナとしての質をそ

なえたときに達成されます。ブラーフマナはサットヴァ・グナ（*sattva-guṇa*）・徳性の象徴です。そして、徳性にいない人々がクシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ、あるいはシュードラ以下に位置づけられます。優れた質に満たされたブラーフマナの境地は、人間生活の頂点にあります。ですから、少なくともブラーフマナの資質がなければ献愛者にはなれません。献愛者の行動そのものがすでにブラーフマナなのです。しかし、それが最終段階ではありません。この節で言われているように、ブラーフマナでさえ、超越的な境地に入るためには真のヴァイシュナヴァになる必要があります。純粋なヴァイシュナヴァは解放された魂であり、ブラーフマナさえ超えています。物質的な段階では、ブラーフマナでさえ条件づけられた魂と考えられます。その段階では、ブラフマンという超越性の境地の悟りはあっても、至高主に関する科学的な知識が欠けているからです。私たちはブラーフマナの段階を超え、人格主神クリシュナを理解するために、ヴァスデーヴァの（*vasudeva*）境地に入らなくてはなりません。人格主神に関する科学は、一段高い精神的な道を歩く人々の研究主題です。愚かな人や知識に欠ける人は至高主を理解できませんし、自分なりにクリシュナを解釈しようとします。しかし、ブラーフマナの境地をも含め、物質様式の穢れを超えていなければ人格主神の科学は理解できません。それが真実です。資質をそなえたブラーフマナがヴァイシュナヴァになるとき、活気あふれる解放の境地に入って、人格主神の正体を実際に知ることができるようになります。

第２１節

भिद्यते हृदयग्रन्थिश्छिद्यन्ते सर्वसंशयाः ।
क्षीयन्ते चास्य कर्माणि दृष्ट एवात्मनीश्वरे ॥ २१ ॥

ビヒデャテー　フリダヤ・グランティシュ
bhidyate hṛdaya-granthiś

チンデャンテー　サルヴァ・サンムシャヤーハ
chidyante sarva-saṁśayāḥ

クシーヤンテー　チャーッシャ　カルマーニ
kṣīyante cāsya karmāṇi

ドゥリシュタ　エーヴァートゥマニーシュヴァレー
dṛṣṭa evātmanīśvare

bhidyate—刺し貫かれる；*hṛdaya*—心；*granthiḥ*—結び目；*chidyante*—粉砕される；*sarva*—すべて；*saṁśayāḥ*—疑念；*kṣīyante*—終結されて；*ca*—そして；*asya*—彼の；*karmāṇi*—果報的活動の鎖；*dṛṣṭe*—見られること；*eva*—確かに；*ātmani*—自己に；*īśvare*—支配している。

こうして心のなかの結び目は刺し貫かれ、疑いは雲散霧消する。結果にこだわる活動の鎖は、自己を主人として見るときに断ち切られるのである。

要旨解説

人格主神に関する科学的な知識にたどりついたときに、自分自身も見つめられるようになります。生物の正体を精神魂として考えることについては、多くの推論や疑いがあります。物質主義者は精神的な自己の存在を信じませんし、総体的魂の存在を「生命体たちが通常そなえている個性を持たない存在」として信じています。しかし超越主義者は、通常の魂と至高の魂は別個の存在であり、双方の質は同じでも規模的に異なることを明確に理解しています。ほかにも理論は多数ありますが、このたぐいの推論は、バクティ・ヨーガをとおしてシュリー・クリシュナを真に理解するときにすべて消滅します。シュリー・クリシュナを太陽とすれば、絶対真理者に関する物質的な推論は闇夜です。クリシュナという太陽が心のなかに現われるとき、絶対真理者に関する物質的な推論という暗闇は跡形もなく消えていきます。太陽が輝いていれば暗闇はありません。無知という闇に隠されている相対的な真理は、至高の魂として全生物の心にいるクリシュナの慈悲によって明らかにされるのです。

『バガヴァッド・ギーター』（第 10 章・第 11 節）で主は、純粋な献愛者に特別な恩寵をしめすために、その心のなかで純粋な知識という光のスイッチを入れて疑いの暗闇を照らす、と言っています。人格主神が心を照らしているのですから、超越的な愛情奉仕をしている献愛者が暗闇にとどまるはずがありません。献愛者は絶対真理と相対真理を熟知しています。暗闇にいつづけるわけがないし、また人格主神によって知識を授けられているのですから、献愛者の知識は完璧です。これは、自分の限られた知識で絶対真理者を想像する者たちには当てはまりません。完璧な知識をパランパラー（*parampara*）といいます。それは、忠実な奉仕をして、素直な心で聞く誠実な人物に権威者が授ける演繹的知識です。至高者の権威に挑戦する気持ちでは至高者を知ることはできません。幻想エネルギーに翻弄され、完全体の小さな一部にすぎない反抗者に自分を見せないのは主の権利です。素直な心を持つ献愛者だからこそ、超越的知識は人格主神からブラフマーに、ブラフマーからその弟子につながる師弟継承をとおして受け継がれます。この過程はそのような献愛者たちの内にいる至高の魂によって支えられています。それが超越的知識を学ぶ完璧な方法なのです。

このように啓発された献愛者は、精神と物質の違いを完璧に見分けられるようになります。精神と物体の結び目が主によって切り離されるからです。この結び目をアハンカーラ（*ahaṅkāra*）といい、生命体はこのアハンカーラのために自分と物質を同一視しています。こ

の結び目がほぐれた瞬間、疑念の雲も消えていきます。自分が仕えるべき主人を知り、主への崇高な愛情奉仕に励み、結果にこだわる活動の鎖を完全に終結させるのです。物質界にいる生命体は、結果にこだわる活動という鎖を自分で作りだし、何度も生まれ変わりながら、その活動から生じる良い結果と悪い結果を楽しんでいます。しかし、主に愛情をこめて仕えればすぐにカルマの鎖から自由になります。その境地にいる献愛者の行為は、もはやカルマを作りだすことはありません。

第２２節

अतो वै कवयो नित्यं भक्तिं परमया मुदा ।
वासुदेवे भगवति कुर्वन्त्यात्मप्रसादनीम् ॥ २२ ॥

アトー　ヴァイ　カヴァヨー　ニテャンム
ato vai kavayo nityaṁ

バハクティンム　パラマヤー　ムダー
bhaktiṁ paramayā mudā

ヴァースデーヴェー　バハガヴァティ
vāsudeve bhagavati

クルヴァンティ　アートゥマ・プラサーダニーンム
kurvanty ātma-prasādanīm

ataḥ—ゆえに; *vai*—確かに; *kavayaḥ*—すべての超越主義者; *nityam*—太古の昔から; *bhaktim*—主への奉仕; *paramayā*—至高の; *mudā*—大きな喜びとともに; *vāsudeve*—シュリー・クリシュナ; *bhagavati*—人格主神; *kurvanti*—行なう; *ātma*—自己; *prasādanīm*—活気づけるもの。

だからこそすべての超越主義者たちは、悠久の昔から大きな喜びにつつまれて人格主神・主シュリー・クリシュナに献愛奉仕をしてきた。そのような献愛奉仕によって自己が活性化されるからである。

要旨解説

人格主神主シュリー・クリシュナに対する献愛奉仕の特殊性が、この節で述べられています。主シュリー・クリシュナはスヴァヤン・ルーパ（*svayaṁ-rūpa*）人格主神であり、シュリー・バラデーヴァ、サンカルシャナ、ヴァースデーヴァ、アニルッダ、プラデュムナ、ナーラーヤナ、さらにはプルシャ・アヴァターラ（*puruṣa-avatāra*）、グナ・アヴァターラ（*guṇa-avatāra*）、

リーラー・アヴァターラ（*līlā-avatāra*）、ユガ・アヴァターラ（*yuga-avatāra*）、他の無数の化身にいたる主のすべての姿は、主シュリー・クリシュナの完全分身、そして総体的な部分体です。生命体は人格主神から分離した部分体です。ゆえに主シュリー・クリシュナは神の根源の姿であり、超越的分野における究極のことばです。ですから主は、主の永遠な娯楽にかかわっている気高い超越主義者の目にはさらに魅力的な存在として写るのです。シュリー・クリシュナやバラデーヴァ以外の人格主神の姿は、主がヴラジャブーミでくりひろげる超越的な娯楽に密接に加わることはありません。主シュリー・クリシュナの崇高な娯楽は、知性に欠ける人々が言う「新しく作られた話」ではありません。主の娯楽は永遠で、ブラフマジーの 1 日に 1 回繰りひろげられ、それは太陽が 24 時間ごとに東の水平線に昇る様子に似ています。

第２３節

सत्त्वं रजस्तम इति प्रकृतेर्गुणास्तै-
र्युक्तः परः पुरुष एक इहास्य धत्ते ।
स्थित्यादये हरिविरिञ्चिहरेति संज्ञाः
श्रेयांसि तत्र खलु सत्त्वतनोर्नृणां स्युः ॥ २३ ॥

サットスヴァンム　ラジャス　タマ　イティ　プラクリテール　グナース　タイル
sattvaṁ rajas tama iti prakṛter guṇās tair

ユクタハ　パラハ　プルシャ　エーカ　イハーッシャ　ダハッテー
yuktaḥ paraḥ puruṣa eka ihāsya dhatte

スティティ・アーダイェー　ハリ・ヴィリンチ・ハレーティ　サンムギャーハ
sthity-ādaye hari-viriñci-hareti saṁjñāḥ

シュレーヤーンムシ　タトゥラ　カハル　サットゥヴァ・タノール　ヌリナーンム　シュフ
śreyāṁsi tatra khalu sattva-tanor nṛṇāṁ syuḥ

sattvam—徳性; *rajaḥ*—激情; *tamaḥ*—無知の暗闇; *iti*—このように; *prakṛteḥ*—物質自然の; *guṇāḥ*—質; *taiḥ*—それらによって; *yuktaḥ*—～とかかわって; *paraḥ*—超越的な; *puruṣaḥ*—その人物; *ekaḥ*—１つ; *iha asya*—この物質界の; *dhatte*—装う; *sthiti-ādaye*—創造、維持、破壊などのために; *hari*—ヴィシュヌ、人格主神; *viriñci*—ブラフマー; *hara*—主シヴァ; *iti*—このように; *saṁjñāḥ*—さまざまな様相; *śreyāṁsi*—究極の恩恵; *tatra*—その中に; *khalu*—もちろん; *sattva*—徳性; *tanoḥ*—姿; *nṛṇām*—人類の; *syuḥ*—得られて。

超越的な人格主神は、物質自然の三様式、すなわち激情・徳性・無知と間接的にかかわっており、物質界の創造・維持・破壊のためだけにブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァという３種類

の質的姿を装う。人類は、これらの姿のなかで徳性の姿であるヴィシュヌから究極の恩恵を受けることができる。

要旨解説

この節では、主の完全分身を媒体としてシュリー・クリシュナに奉仕を捧げなくてはならないことが明言されています。主シュリー・クリシュナとその完全分身はすべてヴィシュヌ・タットヴァ（*viṣṇu-tattva*）、神そのものです。シュリー・クリシュナの次の拡張体はバラデーヴァです。バラデーヴァからサンカルシャナ、サンカルシャナからナーラーヤナ、ナーラーヤナから ２番目のサンカルシャナ、そしてこのサンカルシャナからヴィシュヌのプルシャ・アヴァターラ（*puruṣa-avatāra*）が現われます。ヴィシュヌ、すなわち物質界の徳性の主宰神は、クシーローダカシャーイー・ヴィシュヌ（Kṣīrodakaśāyī Viṣṇu）あるいはパラマートマーとも呼ばれるプルシャ・アヴァターラです。ブラフマーはラジャス・激情、シヴァは無知の主宰神です。この三人の主宰神は物質界の三様式の筆頭者です。創造はヴィシュヌの徳性によって為され、破壊される必要があるときに主シヴァがターンダヴァ・ヌリテャ（*tāṇḍava-nṛtya*）で宇宙を破壊します。物質主義者や愚かな人間はブラフマーやシヴァを崇拝します。しかし純粋な超越主義者は、徳性の、またさまざまな姿を持つヴィシュヌを崇拝します。ヴィシュヌは何億何兆もの総体的な姿、そして分離した姿をとおして現われます。統合された姿は主神、分離した姿は生命体・ジーヴァ（*jīva*）と呼ばれています。ジーヴァも主神も本来の姿を持っています。ジーヴァは物質エネルギーに支配されることがありますが、ヴィシュヌはいつでも物質エネルギーを支配する側にいます。ヴィシュヌ・人格主神は、物質エネルギーに惑わされている生命体を救うために物質界に降誕します。そのような生命体は、主人になるつもりで物質界に現われ、自然の三様式の罠に陥ります。そのため、生命体は物質に覆われてさまざまな拘束を受けなくてはなりません。物質界という牢獄は、人格主神の教えに従うブラフマーによって作られ、カルパ（*kalpa*）の終わりにシヴァによってすべて破壊されます。しかし、牢獄の維持はヴィシュヌが司り、これは国が刑務所を管理している状況と同じです。ですから、誕生・死・病気・老年が繰りかえされる物質存在という悲惨な牢獄を出たいのであれば、解放を求めて主ヴィシュヌを喜ばせなくてはなりません。主ヴィシュヌを崇拝する方法は献愛奉仕だけですが、物質界で投獄生活を続けなくてはならない人は、シヴァ、ブラフマー、インドラ、ヴァルナなど、一時的な救いを提供する相対的な便宜をさまざまな半神に求める必要があります。しかしどのような半神であっても、投獄された生命体を物質界の条件づけられた生活から救う

ことはできません。ヴィシュヌだけができることです。ですから、究極の恩恵はヴィシュヌ、人格主神から授けられるものなのです。

第２４節

पार्थिवाद्दारुणो धूमस्तस्मादग्निस्त्रयीमयः ।
तमसस्तु रजस्तस्मात्सत्त्वं यद्ब्रह्मदर्शनम् ॥ २४ ॥

パールテヒィヴァードゥ　ダールノー　ドゥフーマス
pārthivād dāruṇo dhūmas

タスマードゥ　アグニス　トゥライーマヤハ
tasmād agnis trayīmayaḥ

タマサス　トゥ　ラジャス　タスマートゥ
tamasas tu rajas tasmāt

サットゥヴァンム　ヤドゥ　ブラフマ・ダルシャナム
sattvaṁ yad brahma-darśanam

pārthivāt—土から; *dāruṇaḥ*—薪; *dhūmaḥ*—煙; *tasmāt*—それから; *agniḥ*—火; *trayī*—ヴェーダの儀式; *mayaḥ*—〜で出来た; *tamasaḥ*—無知の性質において; *tu*—しかし; *rajaḥ*—激情; *tasmāt*—それから; *sattvam*—徳性; *yat*—それ; *brahma*—絶対真理者; *darśanam*—悟り。

薪は土が変質したものであるが、煙は生木よりも優れている。火は煙よりも優れている。火を使って（ヴェーダの儀式をとおして）優れた知識という恩恵を得ることができるからである。同じように、激情「ラジャス」は無知「タマス」よりも優れているが、徳性「サットヴァ」がもっとも優れている。徳性によって、絶対真理者を悟る境地に到達できるからである。

要旨解説

上述されているように、人格主神に献愛奉仕をすることで、物質存在という条件づけられた生活から解放されることができます。さらにこの節には、主に献愛奉仕できるように、徳性「サットヴァ」の状態に高められるべきであるという教えも含まれています。しかし、前進している途中で障害に直面しても、熟達した師の導きを受ければ、たとえタマスの状態からでさえ、だれでも徐々に高められることができます。ですから真剣な志願者は、さらに前進できるように熟達した師に近づかなくてはなりませんし、また正しく熟達した師は、タマス、ラジャス、あるいはサットヴァのどの状態からでも弟子を正しく導ける能力をそなえています。

ですから、至高人格主神のどの姿でも崇拝すれば同じ恩恵が得られると考えるのはまちがっています。ヴィシュヌを除き、すべての分離した姿は物質エネルギーによって作られたものですから、物質エネルギーの姿は、物質束縛から私たちを解放させてくれる唯一のサットヴァの状態に高めてくれることはありません。

低俗な生活、あるいは下等な動物の生活はタマスの質に支配されています。さまざまな形の物質的恩恵を強く求める文明人は、ラジャスの状態にいます。その生活環境には、哲学、芸術、道徳や倫理観という繊細な感情をとおして絶対真理者を悟るチャンスがありますが、サットヴァの質は物質ではあっても、絶対真理者を悟る助けになることから、さらに優れています。言いかえれば、ブラフマー、ヴィシュヌ、ハラという主宰神から得られる結果と同じように、崇拝方法の中身はそれぞれ違っているということです。

第２５節

भेजिरे मुनयोऽथाग्रे भगवन्तमधोक्षजम् ।
सत्त्वं विशुद्धं क्षेमाय कल्पन्ते येऽनु तानिह ॥ २५ ॥

ベヘージレー　ムナヨー　タハーグレー
bhejire munayo 'thāgre

バハガヴァンタンム　アドホークシャジャンム
bhagavantam adhokṣajam

サットウヴァンム　ヴィシュッダハンム　クシェーマーヤ
sattvaṁ viśuddhaṁ kṣemāya

カルパンテー　イェー　ヌ　ターン　イハ
kalpante ye 'nu tān iha

bhejire—〜に奉仕をする; *munayaḥ*—聖者達; *atha*—こうして; *agre*—以前に; *bhagavantam*—人格主神に; *adhokṣajam*—超越性; *sattvam*—存在; *viśuddham*—自然の三様式を超えて; *kṣemāya*—究極の恩恵を得るために; *kalpante*—〜にふさわしい; *ye*—それら; *anu*—従う; *tān*—それら; *iha*—この物質界において。

いにしえの偉大な聖者たちは、物質自然の三様式を超越した人格主神に献愛奉仕をしていた。物質的な状態から救われるために主を崇拝したのであり、そのようにして究極の恩恵をさずかったのである。このような偉大な権威者の足跡に従う者はだれでも、物質界から解放されるにふさわしい境地に入る。

要旨解説

宗教を実践する目的は、物質的な利益を得ることでも、精神と物質を判別するだけの単純な知識を得ることでもありません。宗教活動の最終目標は、自分を物質的な束縛から解き放ち、そして人格主神が至高者として存在する崇高な世界での自由な生活を得ることにあります。ですから、宗教原則は人格主神が直接定めたものであり、主の権威ある代表者であるマハージャナ（*mahājana*）以外には、だれも宗教の目標を知りません。その目標を知っている主の代表者は 12 人おり、主に超越的な奉仕を捧げています。永遠な幸福を望む人は、このマハージャナたちの教えに従い、無上の恩恵をさずかることができます。

第２６節

मुमुक्षवो घोररूपान् हित्वा भूतपतीनथ ।
नारायणकलाः शान्ता भजन्ति ह्यनसूयवः ॥ २६ ॥

ムムクシャヴォー　ゴホーラ・ルーパーン
mumukṣavo ghora-rūpān

ヒトゥヴァー　ブゥータ・パティーン　アタハ
hitvā bhūta-patīn atha

ナーラーヤナ・カラーハ　シャーンター
nārāyaṇa-kalāḥ śāntā

バハジャンティ　ヒ　アナスーヤヴァハ
bhajanti hy anasūyavaḥ

mumukṣavaḥ—解放を願っている人々; *ghora*—恐ろしい、不気味な; *rūpān*—そのような姿; *hitvā*—避けている; *bhūta-patīn*—半神達; *atha*—この理由で; *nārāyaṇa*—人格主神; *kalāḥ*—完全部分体; *śāntāḥ*—至上の幸福; *bhajanti*—崇拝する; *hi*—確かに; *anasūyavaḥ*—嫉妬心がない。

解放されることを真剣に求めている人々は嫉妬心がまったくなく、だれにも敬意を払う。しかしなおかつ、かれらが崇拝するのは半神の醜く恐ろしい姿ではなく、主ヴィシュヌや主の完全分身という至上の幸福感につつまれた姿である。

要旨解説

ヴィシュヌ概念の根源の人物である至高人格主神シュリー・クリシュナは、２つの概念、すなわち総体的な完全分身と分離した部分体に自らを拡張させています。分離した部分体は「奉

仕をする側」、総体的な完全部分体・ヴィシュヌ・タットヴァ（*viṣṇu-tattva*）はその「奉仕を受ける側」です。

至高主から力をさずかっている半神も分離した部分体であり、ヴィシュヌ・タットヴァではありません。ヴィシュヌ・タットヴァは根源者・人格主神と等しい力を持つ生命体であり、時代や状況に応じてさまざまな力を現わします。分離した部分体が持つ力には限りがあり、ヴィシュヌ・タットヴァのような無限の力はそなえていません。ですから、ヴィシュヌ・タットヴァ、あるいは人格主神ナーラーヤナという完全部分体と分離した部分体を同じものとして考えてはなりません。そう考える人は、パーシャンディー（*pāṣaṇḍī*）・冒涜者とされます。カリ時代には多くの愚かな人たちがこの冒涜を冒し、２つの存在を同じものと見ています。

分離した部分体は、かれらの持つ物質的な力に応じてさまざまな位置に置かれており、その一部はカーラ・バイラヴァ、シュマシャーナ・バイラヴァ、シャニ、マハーカーリー、チャンディカーなどの名前で呼ばれています。これらの半神は、暗闇あるいは無知にある最下等の人々によって崇拝されている場合がほとんどです。ブラフマー、シヴァ、スーリャ、ガネーシャのような半神は、物質的快楽を渇望する激情の人々によって崇拝されています。しかし、徳性にいる人々はヴィシュヌ・タットヴァだけを崇拝します。ヴィシュヌ・タットヴァはさまざまな名前や姿、たとえばナーラーヤナ、ダーモーダラ、ヴァーマナ、ゴーヴィンダ、アドークシャジャなどの名前で崇拝されています。

正しい資質をもつブラーフマナはシャーラグラーマ・シラー（*śālagrāma-śilā*）によって代表されるヴィシュヌ・タットヴァを崇拝し、高い階級とされるクシャトリヤやヴァイシャの人々もヴィシュヌ・タットヴァを崇拝するのが一般的です。

徳性にいる気高いブラーフマナは、他の崇拝形式を忌み嫌うことはありません。カーラ・バイラヴァやマハーカーリーのような恐ろしい形相をした半神にでさえ敬意をはらいます。かれらは、至高主のそのような恐ろしい姿が多様な状況下で仕えている主の召使いであることをよく知っていますが、恐ろしい姿をしていようと、魅力的な姿をしていようと、半神は崇拝しません。物質界から解放されたいと真剣に考えているからこそ、ヴィシュヌの姿だけに心を集中させます。半神たちは（たとえ半神の筆頭者であるブラフマーでも）私たちに解放の境地を授けることはできません。ヒラニャカシプは永遠の命を得るためにきびしい修行をしましたが、崇拝されたブラフマーはその祝福をかれに授けることはできませんでした。ですから、ヴィシュヌ以外をムクティ・パーダ（*mukti-pāda*）「ムクティ・解放を授けられる人格主神」と呼ぶことはできません。物質界の他の生物と同じ立場にいる半神はすべて、物質創造界が壊滅するときに一掃されます。自分を解放させられないのですから、自分を崇拝する人々を救えないこ

とは言うまでもありません。半神が崇拝者に授けられるのは一時だけの恩恵であり、究極の恩恵は授けられません。

解放を求める志願者がことさら半神崇拝を拒んでいるのはこの理由だけであり、半神を軽んじているわけではありません。

第２７節

रजस्तमःप्रकृतयः समशीला भजन्ति वै ।
पितृभूतप्रजेशादीन् श्रियैश्वर्यप्रजेप्सवः ॥ २७ ॥

ラジャス・タマハ・プラクリタヤハ
rajas-tamaḥ-prakṛtayaḥ

サマ・シーラー バハジャンティ ヴァイ
sama-śīlā bhajanti vai

ピトゥリ・ブーータ・プラジェーシャーディーン
pitṛ-bhūta-prajeśādīn

シュリヤイシュヴァリャ・プラジェープサヴァハ
śriyaiśvarya-prajepsavaḥ

rajaḥ—激情; *tamaḥ*—無知の性質; *prakṛtayaḥ*—そのような考え方; *sama-śīlāḥ*—同じ種類の; *bhajanti*—崇拝する; *vai*—じっさいに; *pita*—先祖達; *bhūta*—他の生物達; *prajeśa-ādīn*—宇宙管理の支配者; *śriyā*—豊かにする; *aiśvarya*—富と力; *prajā*—子孫; *īpsavaḥ*—そのように望んでいる。

激情と無知にいる者は先祖、他の生物、そして宇宙の営みを管理する半神を崇拝する。女性、富、力、子孫という物質的恩恵への欲望に駆りたてられているからである。

要旨解説

神のもとに帰ることを真剣に望む人には、どのような半神でも崇拝する必要はありません。『バガヴァッド・ギーター』（第７章・第 20 節・第 23 節）では、「物質的な快楽に狂奔する者たちは、教養のない者に用意されたはかない恩恵を求めてさまざまな半神にすがる」と言われています。物質的な快楽をさらに高めるような望みを持つべきではありません。そのような楽しみは必要最低限にとどめ、それ以上でも以下でも望むべきではありません。必要以上の快楽におぼれることで、理性を失い、苦しみにさらされることになります。物中心に考える人は、ヴィシュヌ崇拝から得られる恩恵について何も知らないために、もっと富を、もっと女性を、

もっと上流階級へ、とエスカレートするようになります。ヴィシュヌを崇拝すれば、現世でも来世でも恩恵をさずかることができます。この原則を忘れてしまったために、富、妻、子どもを増やすことに目がくらんでいる愚かな人々は、さまざまな半神を拝みます。人生の目的は、苦しみを終わらせることにあり、増やすことではありません。

物質的な楽しみのために半神にすがる必要はありません。半神は主の召使いにすぎないのです。召使いだからこそ、かれらには、水、光、空気などの形で私たちに必需品を供給する義務があります。*私たちは、一生懸命に働き、生きるために働いて得た結果を使って至高主を崇拝しなければなりませんし、またそれが人生のモットーであるべきです。*正しい方法に従いながら神を信頼し、自分の本務を注意深く実践するべきであり、そのような心構えによって、神のもとに帰る道を歩きつづけることができます。

主シュリー・クリシュナは、ヴラジャダーマに住んでいたころ、ヴラジャの住民たちにインドラの崇拝をやめさせ、各自の仕事をしながら神を崇拝し、神に信念を持つよう助言しました。物質的利益を求めて複数の半神を崇拝するのは、じつは宗教の道からの逸脱です。このような宗教的おこないは、『シュリーマド・バーガヴァタム』の最初にカイタヴァ・ダルマ（*kaitava-dharma*）ということばで非難されています。万人が従うべき宗教は世界にただ一つ、それがバーガヴァタ・ダルマ、すなわち至上主だけを崇拝するよう教える宗教です。

第２８－２９節

वासुदेवपरा वेदा वासुदेवपरा मखाः ।
वासुदेवपरा योगा वासुदेवपराः क्रियाः ॥ २८ ॥
वासुदेवपरं ज्ञानं वासुदेवपरं तपः ।
वासुदेवपरो धर्मो वासुदेवपरा गतिः ॥ २९ ॥

ヴァースデーヴァ・パラー　ヴェーダー
vāsudeva-parā vedā

ヴァースデーヴァ・パラー　マカハーハ
vāsudeva-parā makhāḥ

ヴァースデーヴァ・パラー　ヨーガ
vāsudeva-parā yoga

ヴァースデーヴァ・パラーハ　クリヤーハ
vāsudeva-parāḥ kriyāḥ

ヴァースデーヴァ・パランム　ギャーナンム
vāsudeva-paraṁ jñānaṁ

ヴァースデーヴァ・パランム　タパハ
vāsudeva-paraṁ tapaḥ

ヴァースデーヴァ・パロー　ダハルモー
vāsudeva-paro dharmo

ヴァースデーヴァ・パラー　ガティヒ
vāsudeva-parā gatiḥ

vāsudeva—人格主神；*parāḥ*—究極目標；*vedāḥ*—啓示経典；*vāsudeva*—人格主神；*parāḥ*—崇拝のための；*makhāḥ*—儀式；*vāsudeva*—人格主神；*parāḥ*—到達する方法；*yogāḥ*—神秘的な方法；*vāsudeva*—人格主神；*parāḥ*—主の支配下に；*kriyāḥ*—果報的活動；*vāsudeva*—人格主神；*param*—至高者；*jñānam*—知識；*vāsudeva*—人格主神；*param*—最善；*tapaḥ*—苦行；*vāsudeva*—人格主神；*paraḥ*—優れた質；*dharmaḥ*—宗教；*vāsudeva*—人格主神；*parāḥ*—究極の；*gatiḥ*—人生の目標。

啓示経典がしめす知識の究極の対象は、シュリー・クリシュナ、人格主神である。儀式を執行する目的は主を喜ばせることにある。ヨーガは主を悟るためにある。どのような果報的活動も、最終的には主だけによって報いられる。主は至高の知識であり、すべての厳しい苦行は主を知るために行なわれる。宗教（ダルマ・*dharma*）は主に愛情奉仕をすることである。主は人生のもっとも気高い目標である。

要旨解説

シュリー・クリシュナ、人格主神が崇拝の唯一の対象者であることが、この２つのシュローカで確証されています。ヴェーダ経典では同じ主題について述べられています。主との関係をふたたび築き、失われていた主への愛情奉仕をよみがえらせることがヴェーダの骨子です。『バガヴァッド・ギーター』では同じ理論が主自身のことばで確証されています。すなわち、ヴェーダは主を知るためだけにある、ということです。すべての啓示経典は、シュリーラ・ヴャーサデーヴァという主の化身をとおして用意されました。物質自然に惑わされて堕落した魂たちにシュリー・クリシュナ、人格主神を思いださせるためです。どのような半神でも、私たちを物質的束縛から解き放してはくれません。それがすべてのヴェーダ経典の見解です。人格主神についてなにも知らない非人格論者は至高主の無限の力を過小評価し、他の生物と同じ存在として考えているために、かれらが物質的束縛から自由になるには大きな困難を伴います。超越的な知識を求めて幾度となく誕生を繰りかえしたはてに、主に身をゆだねられるようになるのです。

ヴェーダがしめす活動の基本は儀式である、と主張する人がいます。確かにそのとおりです。しかしそのような儀式は、じつはヴァースデーヴァに関する真理を悟るためにあります。ヴァースデーヴァの別名をヤギャ（Yajña）「儀式」といい、『バガヴァッド・ギーター』でも、「すべての儀式や活動はヤギャ、あるいはヴィシュヌ・人格主神の満足のために執行される」と述べられています。ヨーガ体系についても同じことが言えます。ヨーガとは至高主との接触のことです。しかしその手段には、アーサナ（*āsana*）、デャーナ（*dhyāna*）、プラーナーヤーマ（*prāṇāyāma*）、そして瞑想など、身体にかかわる方法が含まれており、どれもパラマートマーとして代表されるヴァースデーヴァという局所的な姿に心を集中させるためにあります。パラマートマーの悟りは、ヴァースデーヴァの部分的な悟りにすぎず、その方法をきわめたあとにヴァースデーヴァを完全に悟ることができます。しかしヨーギーのほとんどは、身体操作によって得られる神秘的な力に心が奪われています。挫折したヨーギーは来世で別のチャンスが与えられ、中断されたヴァースデーヴァの悟りを完成できるよう、善良で教養あるブラーフマナの家庭に生まれたり、あるいは裕福な実業家の家庭に生まれたりすることがあります。そのような幸運なブラーフマナや資産家の息子がチャンスを正しく活かすことができれば、神聖な気質を持つ人物たちとの交流に恵まれ、ヴァースデーヴァをたやすく悟ることができます。しかし不運なことに、そのような機会に恵まれた人がまたしても質的な富や名誉に眩惑され、人生の目標を見失ってしまうことがよくあります。

これは、知識を高めることでも同じです。『バガヴァッド・ギーター』によると、知識の修練には 18 の段階があります。そのような知識の修練によって、慢心や虚栄心がなくなり、非暴力になり、忍耐心が強くなり、心が純真になり、偉大な師に献身的に仕えるようになり、自己抑制ができるようになります。知識を高めることで無執着になり、死・誕生・老年・病気の苦しみが認識できるようになります。そして、その知識は人格主神・ヴァースデーヴァへの献愛奉仕という頂点に達します。ですから、ヴァースデーヴァはさまざまな知識の分野を高める究極の目標と言えます。ヴァースデーヴァに会える崇高な境地に導いてくれる知識の修養こそが、ほんとうの知識です。さまざまな分野を含む物質的知識は、『バガヴァッド・ギーター』でアギャーナ（*ajñāna*）「真の知識に反するもの」として非難されています。物質的知識の行きつくところは感覚満足であり、それは、物質界にいる時間を長引かせ、三重の苦悩に果てしなく苦しめられることを意味しています。物質界の苦しみを長引かせるのは無知にほかなりません。しかし、その物質的知識が精神的な理解に導いてくれるのであれば、物質界での苦しい生活が終わり、ヴァースデーヴァの段階での精神生活が始められるようになります。

同じことがあらゆる種類の苦行にあてはまります。タパッシャ（*tapasya*）には、人生の高いゴールに到達するために自ら進んで身体上の苦痛を受けいれる、という意味が含まれています。ラーヴァナやヒラニャカシプは、感覚満足という最終目標のために苦痛を伴う過酷な苦行をつづけました。現代の政治家も、政治的な収穫を得るためにきびしい苦行をすることがあります。しかし、それはほんとうのタパッシャではありません。ヴァースデーヴァを知るための苦痛なら進んで受けいれるべきです。それがほんとうの苦行なのですから。それ以外の苦行は、激情や無知の苦行に分類されます。激情や無知にかかわっているかぎり人生の苦悩を終わらせることはできません。徳性だけが三重の苦しみを和らげてくれます。主クリシュナの両親ヴァスデーヴァとデーヴァキーは、ヴァースデーヴァを我が子としてさずかるために苦行をしました。主シュリー・クリシュナは全生命体の父（『バガヴァッド・ギーター』第 14 章・第 4 節）ですから、根源の生命体です。すべての享楽者のなかで主こそが根源で永遠な享楽者です。ゆえに、だれであろうと主をさずかる父親にはなれません。主シュリー・クリシュナは、ヴァスデーヴァとデーヴァキーのきびしい苦行に満足して、二人の子どもになることに同意しました。ですから、苦行をするのであれば、知識の最終点であるヴァースデーヴァを得ることに目標を定めなくてはなりません。

ヴァースデーヴァは根源の人格主神、主シュリー・クリシュナです。先に説明したように、根源の人格主神は自らを無数の姿に分身させました。そのような姿は主のさまざまな力によって作りだされます。その力も多種多様で、内的力は質的に優れ、外的力は劣っています。そのことは『バガヴァッド・ギーター』（第 7 章・第 4 － 6 節）でパラー・プラクリティ（*parā prakṛti*）とアパラー・プラクリティ（*aparā prakṛti*）として説明されています。このように、内的力による主のさまざまな拡張体は優れた質を持つ姿ですが、外的力による姿は劣っています。生命体も主の拡張体です。主の内的力によって拡張された生命体は永遠に解放された境地にありますが、物質の力にもとづいて拡張された生命体は永遠に条件づけられています。ですから、知識の修養、苦行、儀式、活動はどれも、私たちを動かしている影響の質を変えるためになされなくてはなりません。いまはだれもが主の外的力に影響されていますが、その影響の中身を変えるためにも、精神的な力を高める努力をしなくてはなりません。『バガヴァッド・ギーター』では、「主クリシュナに奉仕ができるほど心の広い人物たち（マハージャナ）は内的力のなかにあり、その結果として、かれらは一心に主への奉仕に励んでいる」と述べられています。私たちの人生の目標もそうあるべきです。また、それがすべてのヴェーダ経典の見解でもあります。仕事の結果にこだわり、また超越的知識についてむなしい推論をして頭を悩ませてはなりません。だれもが、すぐにでも主への崇高な愛情奉仕をすべきです。また、物質界の創造・維

持・破壊のために主の手となって働いている半神たちを崇拝すべきでもありません。物質界の機能を管理する力強い半神が無数に存在しています。かれらは主ヴァースデーヴァの手足となって主に仕えています。主シヴァやブラフマーでさえ半神のリストに含められていますが、主ヴィシュヌ、すなわちヴァースデーヴァはつねに神聖な立場に君臨しています。主は物質界の徳性の様式を管理していますが、同時に物質の様式をすべて超越しています。その状態をしめす的確な例があります。刑務所には受刑者と管理者がいます。どちらも国の法律に束縛されています。しかし、国王が刑務所を視察に来たとしても、刑務所の法律に束縛されるわけではありません。国王が刑務所の規則を超えている人物であるように、主も物質界の法律を超越した方なのです。

第３０節

स एवेदं ससर्जाग्रे भगवानात्ममायया ।
सदसद्रूपया चासौ गुणमयागुणो विभुः ॥ ३० ॥

サ　エーヴェーダンム　ササルジャーグレー
sa evedaṁ sasarjāgre

バハガヴァーン　アートゥマ・マーヤヤー
bhagavān ātma-māyayā

サドゥ・アサドゥ・ルーパヤー　チャーサウ
sad-asad-rūpayā cāsau

グナマヤーグノー　ヴィブッ
guṇamayāguṇo vibhuḥ

saḥ—それ; *eva*—確かに; *idam*—これ; *sasarja*—創造した; *agre*—以前; *bhagavān*—人格主神; *ātma-māyayā*—自分個人の力によって; *sat*—原因; *asat*—結果; *rūpayā*—姿によって; *ca*—そして; *asau*—同じ主; *guṇa-maya*—物質自然の性質において; *aguṇaḥ*—超越的な; *vibhuḥ*—絶対者。

物質界創造の始めに、絶対人格主神・ヴァースデーヴァは、自らの崇高な境地において、内的力を使って原因と結果の力を創造した。

要旨解説

主の立場はつねに超越的です。物質界の創造に必要な原因と結果の力も主によって作られているからです。ですから、主は物質界の様式に影響されることはありません。主の存在、姿、

活動、主にまつわる物事すべては、物質界が創造されるまえから存在していました。*1 主は*完全に精神的*であり、主の崇高な質とは異なる物質界の質とはまったくかかわりがありません。

---

*1　マーヤーヴァーダ派の筆頭者であるシュリーパーダ・シャンカラーチャーリャ（*Śrīpāda Śaṅkarācārya*）は、自らの『バガヴァッド・ギーター』の注釈書で主クリシュナのこの超越的な立場を認めています。

第３１節

तया विलसितेष्वेषु गुणेषु गुणवानिव ।
अन्तःप्रविष्ट आभाति विज्ञानेन विजृम्भितः ॥ ३१ ॥

タヤー　ヴィラテーシュヴ　エーシュ
tayā vilasiteṣv eṣu

グネーシュ　グナヴァーン　イヴァ
guṇeṣu guṇavān iva

アンタハ・プラヴィシュタ　アーバハーティ
antaḥ-praviṣṭa ābhāti

ヴィギャーネーナ　ヴィジリンビタハ
vijñānena vijṛmbhitaḥ

tayā—それらによって; *vilasiteṣu*—その機能の中にあっても; *eṣu*—これら; *guṇeṣu*—物質自然の様相; *guṇavān*—それらの様相に影響されて; *iva*—～であるかのように; *antaḥ*—～の中で; *praviṣṭaḥ*—～の中に入った; *ābhāti*—そのように見える; *vijñānena*—超越的な意識によって; *vijṛmbhitaḥ*—完全に知りつくして。

主 [ヴァースデーヴァ] は、物質要素を作ったあと、自らを拡張させてそのなかに入っていった。主は自然の物質様式のなかに存在しているかのように、また創造された生物の一人のように見えても、じつはつねにそれらを越えた境地にあり、完全な知識に満たされている方である。

要旨解説

生命体は主から分離した部分体であり、精神界に入る資格のない条件づけられた生命体たちは、物質を存分に楽しむために物質界のいたるところへ送りだされました。主は完全部分体の一人であるパラマートマーとして生命体の心に入り、永遠な友としてかれらが物質を楽しめる

よう導き、そしてその行動の一部始終を見ながらいっしょに生きています。生命体が物質界の生活を楽しんでいるあいだ、主はその物質界の環境に影響されずに、自らの崇高な境地を保っています。ヴェーダ経典（*śruti*）は、両者を１本の木に住んでいる２羽の鳥として説明しています。* 一方は木に実ったくだものを食べ、もう一方はその様子を見つめています。見ている方が主、くだものを食べている方が生命体です。食べている鳥（生命体）は本来の自分をすっかり忘れ、物質の環境のなかで結果をもとめる活動に夢中になっていますが、主（パラマートマー）はいつでも崇高な知識に満たされています。それが至高の魂と条件づけられた魂の違いです。条件づけられた魂たちは自然界の法則に支配されていますが、パラマートマー・至高の魂は、物質エネルギーの支配者です。

*

ドヴァー　スパルナー　サユジャー　サカハーヤー　サマーナンム　ヴリクシャンム　パリシャスヴァジャーテー
dvā suparṇā sayujā sakhāyā samānaṁ vṛkṣaṁ pariṣasvajāte

タヨール　アニャハ　ピッパランム　スヴァードゥヴ　アッティ　アナシュナンー　アニョー　ビヒチャーカシーティ
tayor anyaḥ pippalaṁ svādv atty anaśnann anyo 'bhicākaśīti

（ムンダカ・ウパニシャッド　第３編・第１章・第１節）

第３２節

यथा ह्यवहितो वह्निर्दारुष्वेकः स्वयोनिषु ।
नानेव भाति विश्वात्मा भूतेषु च तथा पुमान् ॥ ३२ ॥

ヤタハー　ヒ　アヴァヒトー　ヴァフニル
yathā hy avahito vahnir

ダールシュヴ　エーカハ　スヴァ・ヨーニシュ
dāruṣv ekaḥ sva-yoniṣu

ナーネーヴァ　バハーティ　ヴィシュヴァートゥマー
nāneva bhāti viśvātmā

ブヮーテーシュ　チャ　タタハー　プマーン
bhūteṣu ca tathā pumān

yathā—同じ程度に; *hi*—まさしくそのように; *avahitaḥ*—〜で充満している; *vahniḥ*—火; *dāruṣu*—木の中の; *ekaḥ*—一つ; *sva-yoniṣu*—現象の源; *nānā iva*—さまざまな生物のように; *bhāti*—照らす; *viśva-ātmā*—パラマートマーとしての主; *bhūteṣu*—生物の中の; *ca*—そして; *tathā*—同じように; *pumān*—絶対者。

火が木のなかに入っているように、主はパラマートマーとして一切万物の内に浸透している。そして、唯一絶対者ではあるけれども、多様性を持つ存在に見える。

要旨解説

主ヴァースデーヴァ・至高人格主神は、自らの完全部分体の１つとなって物質界全体に広がり、その存在は原子エネルギーのなかにでさえ見ることができます。物質、反物質、陽子、中性子など、すべては主のパラマートマーの姿から生じています。木から火が発生するように、また牛乳を撹拌（かくはん）してバターが取りだせるように、主のパラマートマーの存在は、ウパニシャッドやヴェーダーンタといったヴェーダ経典が説く崇高な教えを正しく聞いて唱えれば、理解することができます。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、そのヴェーダ経典の正しい解説書です。超越的なメッセージを聞くことで主を悟ることができ、これが崇高な主題を体験するただ一つの方法です。木のなかの火を別の火によって取りだせるように、私たちの神聖な意識は別の神聖な恩寵によって取りだすことができます。主の恩寵の現われである師は、受けとめる気持ちのある人の耳に適切な精神的メッセージを注ぎ、「木」に比べられる生命体から精神的な火を取りだすことができます。ですから、受けいれる心構えで正しい師に近づく必要があり、その条件が整えばやがて神聖な存在について理解できるようになります。動物か人間の違いは、この点で決まります。人は正しく聞くことができますが、動物にはできません。

第３３節

असौ गुणमयैर्भावैर्भूतसूक्ष्मेन्द्रियात्मभिः ।
स्वनिर्मितेषु निर्विष्टो भुङ्क्ते भूतेषु तद्गुणान् ॥ ३३ ॥

アサウ　グナマヤイル　バハーヴァイル
asau guṇamayair bhāvair

ブゥータ・スークシュメーンドゥリヤートゥマビヒヒ
bhūta-sūkṣmendriyātmabhiḥ

スヴァ・ニルミテーシュ　ニルヴィシュトー
sva-nirmiteṣu nirviṣṭo

ブゥンクテー　ブゥーテーシュ　タドゥ・グナーン
bhuṅkte bhūteṣu tad-guṇān

asau—そのパラマートマー; *guṇa-mayaiḥ*—自然の様相によって影響されて; *bhāvaiḥ*—自然に; *bhūta*—創造された; *sūkṣma*—希薄な; *indriya*—諸感覚; *ātmabhiḥ*—生物達によって;

sva-nirmiteṣu—主自身の創造によって; *nirviṣṭaḥ*—入っている; *bhuṅkte*—楽しませる; *bhūteṣu*—生物達の中で; *tat-guṇān*—それらの自然の様相。

至高の魂は、物質自然の様式に惑わされている生物の体内に入り、その様式が作りだす結果を生物たちが心をとおして楽しめるように駆りたてている。

要旨解説

生物には、高等な知的生物ブラフマーから小さなアリを含めて 840 万種類あり、すべての生物が希薄な心や肉体の望みに応じて物質界を楽しもうとしています。濃密な物質の体は希薄な体の状態にもとづいて作られ、さまざまな感覚はその生物の望みに応じて作られます。生物がなにかを手に入れようと望んでも、あらゆる面で無力なために、主はパラマートマーとして、かれらが物欲を満たせるよう助けます。魂が望み、主がその望みを満たすのです。ある意味で生物は主の部分体ですから、主と生物は一体であるとも言えます。『バガヴァッド・ギーター』で主は、「さまざまな体を持つ生命体はわたしの子どもである」と明言しています。子どもの苦しみや楽しみは、父親にとっても同じです。それでも、父は子どもたちの苦楽に直接影響されることはありません。主は、パラマートマーとして私たちとともに生き、私たちがほんとうの幸せに目覚めるよう導こうとしています。それほど主は親切な方なのです。

第３４節

भावयत्येष सत्त्वेन लोकान् वै लोकभावनः ।
लीलावतारानुरतो देवतिर्यङ्नरादिषु ॥ ३४ ॥

バハーヴァヤティ　エーシャ　サットゥヴェーナ
bhāvayaty eṣa sattvena

ローカーン　ヴァイ　ローカ・バハーヴァナハ
lokān vai loka-bhāvanaḥ

リーラーヴァターラーヌラトー
līlāvatārānurato

デーヴァ・ティリャン・ナラーディシュ
deva-tiryaṅ-narādiṣu

bhāvayati—維持する; *eṣaḥ*—これらすべて; *sattvena*—徳性において; *lokān*—宇宙全体; *vai*—確かに; *loka-bhāvanaḥ*—全宇宙の主人; *līlā*—娯楽; *avatāra*—化身; *anurataḥ*—役割を果たしている; *deva*—半神達; *tiryak*—下等な動物; *nara-ādiṣu*—人類の中で。

このように、宇宙の主は、半神、人類、下等生物が住む全惑星を維持している。化身の役割を果たしながら、主は純粋な徳性にいる生命体を呼びもどすために、崇高な娯楽を繰りひろげるのである。

要旨解説

無数の物質宇宙があり、そのなかに多様な性質を持つさまざまな段階の生物が住む惑星が無数に散在しています。主（ヴィシュヌ）はその惑星内の全生物の社会に化身となって入り、生物たちが主のもとに戻る望みをいだくように崇高な娯楽を表わします。主は自分本来の神聖な立場を変えることはありませんが、特定の時代や社会に応じてさまざまな姿となって降誕します。

主は自ら降誕したり、自分に代わって行動するにふさわしい生命体に力を授けて降誕させたりしますが、目的は一つしかありません。苦しんでいる生命体を神のもとに、ふるさとに帰してあげたいと考えているのです。生命体が探しもとめている幸福は、無数の宇宙のどの惑星に行っても見つかりません。永遠な幸福は神の国にあるのですが、物質界の様式に惑わされて自分の正体を完全に忘れている魂は、神の国についてなにも知りません。だからこそ主は、主の国についてあまねく知らせるために自ら化身として降誕し、あるいは神の優れた子である正しい代表者を私たちに送ります。そのような神の化身や子どもは、神のもとに帰る教えを人間社会だけで広めているわけではありません。半神や人類を含めたあらゆる種類の社会で繰りひろげているのです。

これでバクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』の第１編・第２章、「神聖さと神聖な奉仕」についての要旨解説を終了します。